The Kansai University Bulletin

關西大學學報

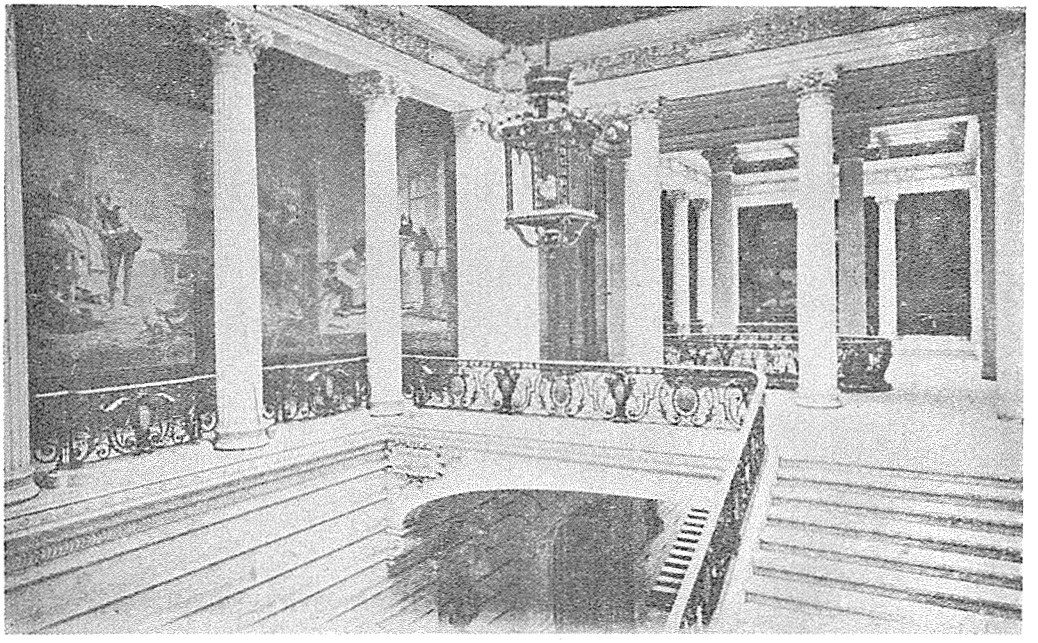
昭和七年　第九十七號　三月十五日發行

春　早

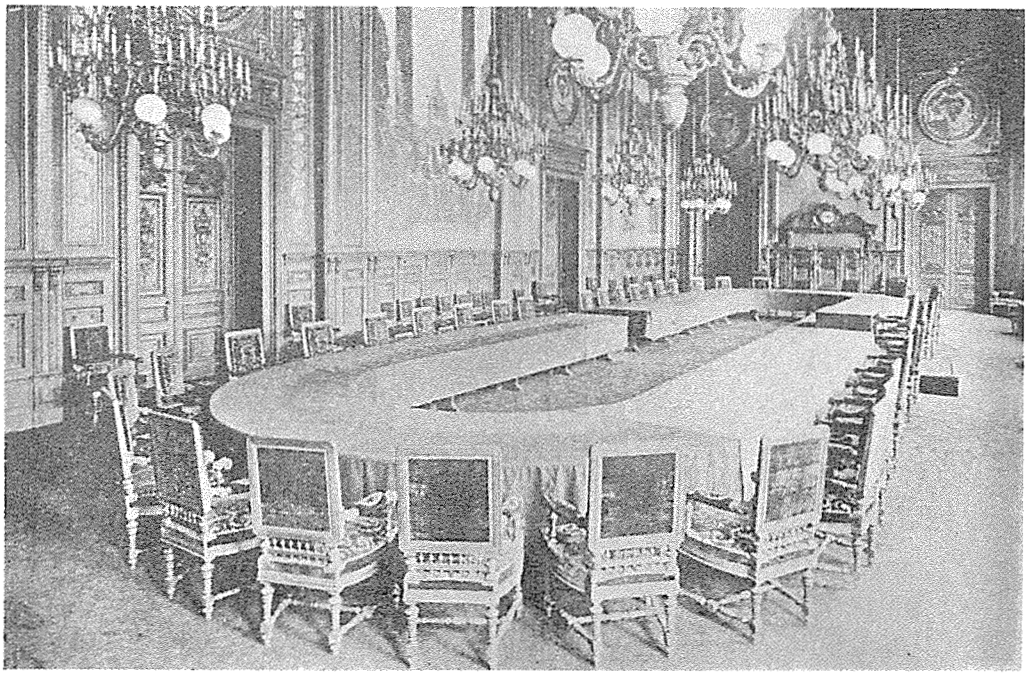
關西大學學報局

歐米の大學（二十ノ其）

University of Paris



Grand Stairway.



Faculty Room.

關西大學學報　第九十七號

目次

紀元節と國民の覺悟……（四）
學長　仁保龜松

景氣變動論に於ける景氣Konjunkturの概念（六）
教授　正井敬次

ハイデイガーのカント解釋（承前）……（一五）
講師　菅守常

ケインズの基本方程式（三）……（一八）
講師　森川太郎

學内報……（二五）
卒業式豫告――威德館落成式――衆議院議員當選者――住所移動

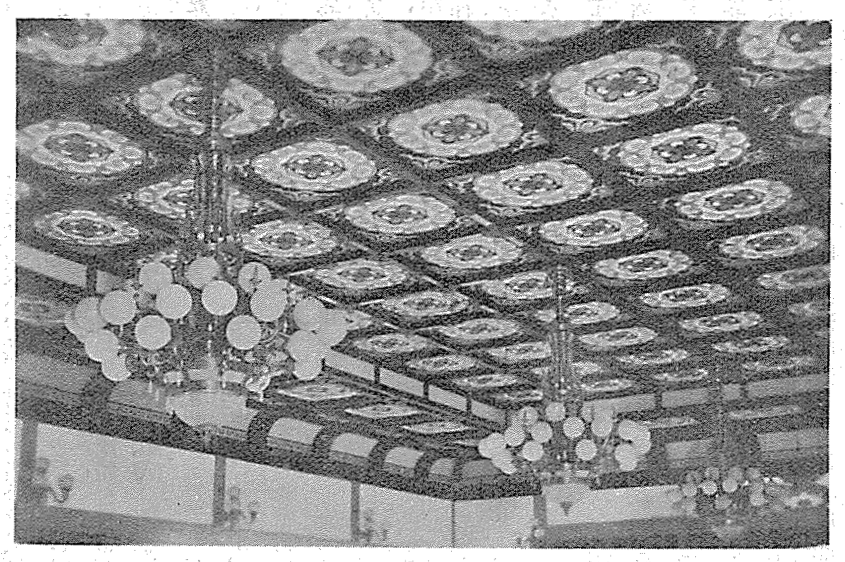
威德館建設基金寄附者……（二八）

校友彙報……（三〇）

學生彙報……（三一）

昭和六年度學友會收支決算並に昭和七年度收支豫算……（三三）

圖書館新著圖書一覽……（三七）



威德館の格天井とシャンデリア

紀元節と國民の覺悟

學長
法學博士　仁保龜松

本稿は紀元節當日仁保學長がJOBKより放送されたる「紀元節奉祝大會の趣旨」であります。

――編者――

今を去ること實に、二千五百九十二年の古へに於きまして、我が皇宗神武天皇が、天資英邁剛毅に渡らせられ、親しく千辛萬苦を嘗めさせられ、幾多の强敵土匪を征伏し玉ひ、終に我が中つ國を平定して、最初の皇位に即き玉ひ、之に依つて大日本帝國が始めて國家組織の要件を具備し、目出度成立するに至りました其の日、即ち我等國民に取つて、最も光輝ある當日を記念する爲めに、關東に在つては今朝東京上野公園に於きまして、花々しく建國祭が擧行せられ、又關西に在つては之と相俟つて只今大阪中之島公園に於きまして、極めて盛大莊重に、紀元節奉祝大會が開催せられつゝあります。不肖私が此の大會を代表致しまして、ラヂオに依つて我が國民全體と共に、衷心よりの祝意を表し、併せて大會擧行の趣旨を述ぶることを得まするのは、私に取つて最も光榮とする所であります。

謹んで按ずるに、我が建國の大業は眞に悠遠の古へに遡りまして、殊に御身自ら平和と光明との二大理想を表現し玉へる天照大神を以て天祖と仰ぎ奉り、其の後を承けて國土に君臨し玉へる萬世一系の天皇は、畏多くも明智と仁愛と勇氣との三大德を表示する三種の神器を奉じて國民を愛撫し玉ひ、然も君臣の名分は夙に明定確立して、上には皇統連綿絶ゆる時なく、下には億兆心を一にして世々厥の美を濟し、實に天壤と共に究まりなき萬邦無比の國體を爲したのであります。

斯の如き金甌無缺の國體が、儼として永久に存立致しますることは、決して偶然ではありませぬ。畏くも皇祖皇宗、並に歷代天皇の御稜威の下に於きまして、我等臣民の祖先が、常に忠君愛國、義勇奉公の眞心を捧げ、時運に處して其の宜しきを得たるに因るのであります。之に依つて我等國民は夙に國家的生活に安んじ、夫々生業に勵しむことを得たのであつて、眞に至幸至福、齊しく我が建國の美はしきを讃嘆し、世界に儔ひなき此の國體を誇るのであります。

然るに翻つて近時の國情を通觀致しまするときは、種々の國難が相次いで起り、實に憂慮に堪へざるものがあります。中にも內に在つては、國民精神が漸く弛みまして、矯激なる外來思想の爲めに侵蝕せらるる有樣を呈し甚しきに至つては臣民たる大義を忘れて、國體の尊嚴を冒瀆し皇道の大本に悖つて恥ぢざる者あるに至りましたことは、誠に慨歎悲憤に堪へざる所であります。然も此の種の國難は强壓手段のみに依つて一時に之を克服排除すること能はないものであります。夫故に我等は協心戮力、今後一層有力なる矯正教化の方法を盡し、殊に思想惡化の誘因たる政治的、經濟的其の他、社會的諸關係を改善するに付て、一層努力せんことを期するものであります。

更に眼を外に轉じて、國際上の大勢を達觀致しまするときは、隣邦其

の他列國との關係に於きまして、我が國は實に前古未曾有の國難に直面し、國運消長の危機に瀕することを痛感せざるを得ないのであります。

我等國民は、軍事上に於きましては、因より忠勇無比の、陸海軍に信頼いたしまして、心を安んずるのでありますけれども、外交上に於きましては、我が國が努めて正義人道を尊重し、條約其の他國際法の遵守に付て、甚だ忠實なるに拘らず、隣邦政府の言行は、常に不信不正を極め又其の國民は、益々亂暴狼藉に流れ、然も極東の事情に通ぜざる歐米の列强は、只管一種の猜疑心に驅られて、事實を正視せざる處多く、謂ゆる認識不足なるに比して、口說多きに過ぎ、常に自國の勢力の擴張、又は權益の獲得に汲々たるが故に、此等諸國との交渉は、極めて難澁微妙でありまして、絶えず不調又は決裂の危險を伴ふのであります。殊に將來我が國が、國家存立の必要上、當然亞細亞大陸に向つて進出せざるを得ざるに當りましては、隣邦は勿論、國際聯盟及び其の他の强國との關係に於きまして、常に多大の障碍に衝突することは、今より之を篤と覺悟せねばならぬと心得ます。然しながら、之と同時に私は、由來我が國民が國家の危難に遭遇して、徒に落膽喪心することなく、寧ろ反動的に奮起して、新に國運發展の途を開きましたことは、過去の史實に徵して我が國民性の特徵たること、即ち大和魂固有の大活力たることを信じて疑はないのであります。

今や我が帝國の重大時機に當りまして、我等國民の最も注意せざるべからざることは、時局に關して、能く其の眞相を諒解し、更に日々の成り行きを知悉すると共に、必ず沈着の態度を保ち、深く言論を愼みて、斷じて國內の紛議を生ぜしむることなく、殊に建國の大精神に鑑みて、擧國一致の實を擧げ、軍事上並に外交上に於きまして、深く當局者の献身的努力を感謝すると共に、極力堅實なる國民的後援を提供し、正々堂々として國難の打開と其の克服とに邁進するに在りと信じます。

我が建國の大精神は、畏くも天孫降臨に際して、天祖の授け玉ひたる神勅と、即位建國の時に當つて、皇祖の下し給ひたる大令とに照して、我等國民は明に之を諒解することを得るのであります。而して此の大精神を振起するに付て最も適切なる機會は、皇宗神武天皇御即位の當日、即ち大日本帝國が始めて、成立致しました其の日を記念する紀元節を差し措いて、他に之を求むることを得ない筈であります。殊に今日我等國民が國際關係上の國難に直面致しまして、遠く建國の當時に於ける、我等祖先の艱難辛苦を追想致しまする時は、實に感慨無量、心氣自ら發奮勇躍するを覺えるのであります。之れ即ち本日の佳節に當りまして奉祝大會を擧行し、我等國民が俱に共に滿腔の熱誠を以て建國の大業を讃嘆し、歲と共に其の大精神を新たならしめんとする所以でありまして、之に依つて又一切の國難を克服排除するのみならず、益々建國の大理想を實現すべき國民的大活動の基礎を確立し、上之を以て祖先に應へ、下之に依つて子孫に傳ふる所あるべきを信ずる次第であります。

本日此に會同する我等は、即ち此の確信に立ちまして、我が國最高の記念日なる紀元節を奉祝し、更に崇高莊大なる建國の大精神を益々發揮せんことを期するものであります。

終に臨んで、我等は切に大日本帝國の前途を祝福し、謹んで今上陛下の聖壽無量を祈願し奉りまする。

景氣變動論に於ける景氣(Konjunktur)の概念

教授　正井敬次

一

廣き意味に於ける經濟の變動は、ハーバアド學派によれば四の種類に區分せられる。即ち、(一)長期的變動、(二)季節的變動、(三)循環的變動—景氣變動、(四)偶然的變動、これである。而して一般に說かるゝ所の景氣變動とは、右の第三の種類に屬する所の經濟變動を指して云ふものであると考へられてゐる。

景氣變動の意味を右の如きものと見て、さて謂はるゝ所の「景氣」とは果して何であるか、それの概念構成に就て考へること、それがこの小文の目的とする所である。

「景氣」とは何であるか、と云ふが如き問題は、併し、一般の論者によれば、それは寧ろ閑問題であるとせられてゐる。論者はたゞ、景氣とは經濟運動の狀態であると見る。而して、此問題に就ては、もはやそれ以上に考を及ぼすの必要はないとする。

勿論、景氣の何であるやは、言葉の約束に關する問題である。そこで景氣變動論の論者が、景氣とは經濟活動の狀態であるとして、景氣を論ずるならば、それはそれでよいのである。右の如くに謂はるる所の景氣概念の外に、學問上斯くあらねばならぬと云ふが如き景氣の概念が、他に存在するや否やを考ふるが如きは、無用のことであると言つて差支がない。

然らば何故に私は茲に更めて景氣の概念を說かんとするのであるか。私は定義の爲に定義することを好む者ではない。併しながら今若し、景氣と云ふことは如何なる意味の言葉であるか、と云ふことを考へることによつて、一般に說かるゝ所の複雜なる且つ取り止めなき所の景氣變動の形象を何等かの形に於て引き締めることが出來得るならば、私は景氣概念の考究は必ずしも無用のものではないと考へる。私の目的とする所は景氣概念の考究によつて、景氣形象の標準化と景氣觀測の單純化に向つての途を發見せんとするに在る。景氣概念が何であらねばならぬかと云ふ點は必ずしも重要ではない。

「景氣とは經濟活動の狀態である」とする景氣の概念が一般的であるかの如くに述べたのは、多くの學者の意見を綜合的に見て、左樣に言つたまでゝある。例へばピグーが、景氣變動とは、事實上に於て仕事を持つ所の、社會に於ける所得獲得力 (Income-getting Power) の割合の變動である」と言ひ、又ホートレーが「景氣變動の特徵は、生產的活動力の變化と物價水準の變動とに存する」と言ふ場合彼等は景氣自體を何と見るかと云へば、大體に於て彼等は、景氣とは經濟活動の狀態であると見る者であるとしか云ひ得ない。

二

私は「景氣とは經濟の動きである」と云ふが如き、景氣に關する漠然たる考は、結局景氣變動論をして、取り止めなきものたらしめはしないかと考へる。即ち景氣とは經濟の動きであると見る場合、景氣變動の形象は何であるかと云へば、それは經濟量の數多き指數の羅列である、數

多き時系列の波である。然らば、吾々は多くの指數を綜合することによつて、景氣そのものの動きを示す爲め、一般的景氣指數なるものを作ることが出來るかと云ふに、それは寧ろ不可能に近い。

高田博士も景氣徵候論（經濟論叢第三十三卷第五號）に於て景氣形象に關する一般指數は合理的には作り得られない、と述べられた。

私は想ふ。經濟の動き、それは畢竟價値現象である。併しながら資本經濟組織の下に於ける、社會的價値現象の複雜なる姿は、其は或る一種の特殊なる價値現象にまで、統一せしめられ綜合せしめられ得る所のものではあるまいか。而して「景氣」自體の意義が、右の如き一種の價値現象に結び付けらるるとき、景氣變動論は初めてそれの樞軸を持つに至るものではあるまいか。右の如き考に基き、私は「景氣」の概念はこれを私の所謂「貨幣の主觀的價値」に結び付けることが妥當ではないかと考ふるに至つた。

英米にては、景氣變動のことを Trade Cycle, Business Cycle 又は Industrial Fluctuation と云ひ、而して好景氣を Good Trade 不景氣を Bad Trade と云つておる。從つて英米にては景氣は即ち Trade であり、景氣を現はすものは商取引量（Volume of Trade）であると見らるゝの傾がある。

獨乙語の Konjunktur（景氣）は併し、經濟活動又は商取引量の狀態そのものではなくして、それ等のものに對して原動力をなす所の、經濟的の氣運又は機運である。吾々が考ふる所の本來の意味に於ける景氣は、Trade ではなくして矢張 Konjunktur であると思はれる。

右によつて知らるゝが如く、私は景氣の意味は本來は主觀的のものであると見る。併し乍ら私に於ては、一般化せられたる又は社會的なる主觀は後に說くが如くに、それは一の客觀的且つ量的の表現を持ち得るものとせられる。斯の如き見地に於て、私は私の景氣の概念を說かんとするのであるが、併しそれに先立ちて、私は、稀に試みらるる所のあつた古今の學者に於ける景氣概念の構成が、如何なるものであつたかに就て一言することを、無意義ではないとする。

三

今日の學者の中にては、ロエプケが珍しくも、「景氣」とは何であるかの問題に答へんとするの興味を持つた（W. Roepke, Die Konjunktur, 1922）、今私は、ロエプケ氏に聞きつゝ、景氣が果して何を意味するやを考へて見る。

ラテン語に Conjunctio rerum omnium（總ての者を結び付ける聯鎖）と云ふ言葉があるが、それは古代のオルフユース教の教徒によつて信ぜられし「宿命の輪」のことを說明せる言葉である。

Conjunctio 即ち Konjunktur は實に宿命の又は因果の絆である。斯くしてラサールは「景氣」を說明するに次の如き言葉を以てした。曰く「社會的の依存關係と云ふものは、其は恰も、後の總ての者を結び付けると云はれし、オルフユース教の宿命の輪の如きものである。然るにこのオルフユースの輪が、今日の商業的の世界に於て、商人や企業家の間にたとへ意識せられずにとは言へ、尙昔のまゝの名に於て存在しておると云ふことは、輕々に看逃し得ざる所である。總ての人を、豫知し難き所の狀態にと拘束する所の、この社會的依存關係の絆、即ちこの聯鎖こそ、それが即ち吾々の商業的の社會に於て謂はるる所の Konjunktur なるものであると。

次に、更にシエフレに於ても亦景氣に就て、右と同樣の根據に立つ所

の説明がなされた。曰く「景氣とは、總ての活動主體に隨時に作用する所の豫知し又は豫測し難く且つ避け難き所の、外部の影響である」と。Konjunktur と云ふ言葉に即して景氣の意味を解するときは、以上古人の言葉にも現はるゝが如く、景氣とは、箇々の經濟人に於ては之を如何ともなし難き所の、社會的經濟的の「氣運」である、と見ることが適當であるかの如くに思はれる。然り、景氣それ自體の意味は正に社會經濟上の氣運であると云ふに盡される。併しながら今これを一の經濟現象として見んとするとき、經濟上の氣運は商品需要供給の狀態に於て現はれるものと看做すことが出來る。斯の如き見方に基きて、ロエプケは即ち「景氣とは、豫測と支配との遙かに及ばざる所の、一の市場に於ける供給と需要との狀態である」と言ふ（Roepke, Ebenda, S. 9）。

景氣を以て、市場に於ける商品需要供給の豫知し難く又避け難き狀態であると見ることは、私を以て見れば、景氣とは生產と消費との狀態に於て發現する所の、經濟的の氣運であると言ふに等しい。併し氣運と云ふが如き漠然たる言葉は、其は景氣を說明するものとしては、未だ不充分であり且つ不適當であると言はねばならぬ。

思ふに、生產と消費との狀態に於て現はるゝ所の經濟的の氣運とは、生產者並に消費者の間に於て一般的となれる、社會的なる價値判斷の傾向であると云ふことは出來ないであらう。好景氣とは生產力並に消費力の陽發であり、不景氣とはそれ等のものの陰塞である。而して景氣自體は、或は生產をして陽氣せしめ、或は消費をして陰塞せしむる所の經濟的の氣運そのものである。然らば即ち、斯の如き氣運とは、一般化せられ社會化せられたる、經濟人の間に於ける、價値判斷の又は價値感情の傾向であるとは云ひ得ないであらふか。

四

想ふに、今日の經濟組織たる資本經濟の下に於ては、生產者は貨幣の形に於ける利潤を成るべく多く擧ぐることを以て、彼の經濟的活動の目的となし、消費者は收入と支出との餘剩を成るべく多く貨幣の形に於て保有せんことを、これ努める。斯の如くにして今日に於ては、經濟する者の目的と努力とは、一に貨幣の形に於ける餘剩價値の蓄積と云ふことに向つて注がれる。それが社會經濟の理想に合致するや否やは別問題として、兎に角、右の如きが今日に於て現實に經濟する者の理念であり、而して斯の如き理念が今日の經濟を動かしつゝある所の原動力であることは確かである。

然らば斯の如き經濟に於て、生產と消費との陽發、換言すれば生產力と消費力との憚る所なき發展を促す所の氣運なるものは、之を價値と云ふ言葉に飜譯するときは何であるかと云へば、其は即ち貨幣に對する社會的の價値感情であると云ふことが出來る。何となれば、目前の計としては貨幣の穀に價値をかくまふの必要が少なし、と見る感情が社會的のものとなるとき、其處には顧慮する所なき生產と消費とが行はるゝに至るが故に、生產と消費との消長は一に社會的なる貨幣價値判斷の傾向如何に懸るものと云ひ得るが故である。右の如くにして、私に於ては、景氣とは實に社會的なる貨幣價値判斷の傾向そのものである、との立言が許され得る。

更に他の方面よりして之を說明する。

景氣變動は之を價格の現象として見るとき、其の經濟の靜態（シュム

ペエターの意味に於ける靜態ではなく、單に靜止經濟と云ふ意味の靜態）に於ける價格の均衡（生產要素の價格と生產物價格との均衡）が、それの破壞よりして一の他の均衡への安定へ、而して一の安定よりして又それの破壞へと、押し進められる所の狀態を意味するものと看做し得る。然らばこの場合、景氣とは何であるかと云へば、其は價格の均衡を破る所の一の勢力であると云つてよい。而して斯の如き勢力とは何であるかと云へば、其は或は生產者の側に於て、或は消費者の側に於て、或は又その兩者の側に於て共通に釀成せらるゝ所の、貨幣に對する價値感情に他ならぬ。

更に今、勞銀＋利子＋地代＋利潤＝生產物價格　と云ふ價格の均衡を假設し、この均衡が景氣の作用によりて變動を受くる場合に就て考へる

この場合、生產者の側に於て發する所の景氣は利潤の增大又は減少の見込に基きて釀成せられる。即ち利潤增大の見込は、貨幣價値を消極的に（低く）判斷せしむるの原因であつて、其は生產の擴張と預金の減少又は借入金の增加とを促すものであり、反對に利潤減少の見込は、貨幣價値を積極的に（高く）判斷せしむるに至るが故に、生產の縮少と預金の增加又は借入金の減少とを促す所のものである。前の場合は即ち生產者の側に於て發する所の好景氣であり、後の場合は即ち生產者の側に生ずる不景氣である。

次に消費者の側に生ずる所の景氣に就て見るに、此場合消費者とは、勞銀と利子並に地代とを以て所得とする所の勤勞者並に純資本家であるが、消費者に於ては、其所得に變化なきに拘らず、消費貨物の價格に變化の生ずることが見込まるる場合、又は反對に後者に變化なきに拘らず前者に變動の生ずることが見込まるる場合、其處に消費者景氣の變化が發生する。即ち以上何れかの變動によりて、消費者に於て所得の餘剩が發生又は增加するの見込あるときは、消費者に於ては貨幣價値を消極的に見るの傾向が生じ、所得の餘剩が減少するの見込なるときは、貨幣價値を積極的に判斷するの傾向が生ずる。前の場合は消費の促進となるが故に、消費者の側に好景氣が發生し、後の場合は消費の手控へを伴ふが故に不景氣を釀成する。

更に、生產者並に消費者に共通の景氣とは、好景氣に關して云へば、生產者に於ては利潤增大の見込が、消費者に於ては餘剩所得增加の見込が存在するとき、兩者の側に於て共に貨幣價値が消極的に判斷せられ生產の擴張と消費の增加とが相並んで行はれんとするの氣運が生れるのであるが、斯の如きが即ち一般的なる好景氣の發現である。

以上私は景氣を以て一の經濟的氣運であると云ひ、又一の勢力であると云ひ、更に進んでは之を以て社會的なる貨幣價値感情であるとした。蓋し既に言ふが如く、資本經濟組織の社會に於て、個々の經濟人に於ける生產と消費とを支配する所の氣運又は勢力とは、畢竟價値を貨幣の形に於て保全するを有利とするや否やと云ふ、貨幣價値判斷に關する社會的傾向に他ならぬものと考へらるるが故である。

ラサールの言ふが如く、景氣とは社會各人を豫知し難き狀態に結び付ける所の、經濟的依存關係の聯鎖であるかも知れない。併し右の如くに言ふのみにては、恐くば未だ景氣そのものの姿は吾人の眼前には充分に浮び出でないであらう。資本經濟組織の吾人の社會に於ける景氣とは、其は箇人的なる貨幣價値感情を以ては之を如何ともなし難き所の、各種

の經濟階級人の依存關係を一般的に支配する所の、社會的なる貨幣價値感情の絆であると云はなければならない。

五

以上、私は景氣を以て社會的なる貨幣價値感情であるとする。併しながら右の如くに謂はるゝ所の景氣は、其は果して一定の經濟量として觀念し得らるるものであるか如何か。

私は曩に小著「貨幣と爲替」に於て、物價の原因としての貨幣價値、即ち社會的主觀の貨幣價値は、一定の量的表現を持ち得るものなることを述べた。即ち右の如き意味に於ける貨幣價値の決定は、私に於ては、社會に於ける貨幣の存在量と流通數量との間の割合を求むることによつて、之を行ひ得るのであつた。

右述ぶる所によつて知らるるが如く、私の意味する所の景氣とは貨幣の社會的主觀價値に他ならぬのである。是に於てか即ち景氣の表現は所謂貨幣價値の表現そのものであり得る。但し貨幣價値の大なるときは景氣は消極的であり、貨幣價値の小なるとき景氣は積極的である。故に景氣の指數は、私の所謂貨幣價値の量的表示たる $\frac{\text{貨幣の存在量}}{\text{貨幣の流通量}}$ の指數の逆數である。是を以て見れば、景氣の指數は、廣き意味に於ける貨幣の流通速度の指數に等しい。斯くして私に於ては、謂ふが如き貨幣流通速度の大小が、それ自體に於て景氣の好惡を表徵するものと見做され得る

私は物價を決定する所の原因力としての貨幣價値は $\frac{\text{貨幣の存在量}}{\text{貨幣の流通量}}$ と云ふ量的表現を持つ所のものであるとする（拙著「貨幣と爲替」一〇三頁以下參照）。この場合貨幣の流通量とは社會各人の一定時に於ける貨幣收入（又は支出）の總計である。貨幣價値の逆數、即ち貨幣の流通量を貨幣の存在量を以て除したる數が、右に云ふ廣き意味に於ける貨幣の流通速度である。「廣き意味に於ける」と云ふはそれがフヒシャーの交換方程式 MV＝PT に於ける Velocity とは必ずしも其意味を同じくせないが故である。

私の謂ふ所の流通速度は、ピグーの所謂 Income-velocity of Circulation である（Pigou, Industrial Fluctuation, 1929. p. 168.）。

ケーンズは銀行貨幣に就て velocity と Efficiency とを區別し、後者は價値保有手段としての貨幣をも加へたる貨幣の存在量を以て、貨幣の流通量を除したるものであるとする（Keynes, A Treatise on Money, vol. II p. 20—25）。私の所謂流通速度は又ケーンズの謂ふ Efficiency に等しい。

兎に角、私は茲に流通速度と云ふ言葉を用ひ、而してそれを以て右に言ふ貨幣價値の逆數を示すと同時に景氣そのものを表現する所のものであるとする。

私の物價論によれば、物價と金利（商品の價格と資金用役の價格）とは、共に右に言ふが如き貨幣の社會的主觀價値にそれの動因を持つ。是に於てか、物價と金利の指數は共に右に言ふ所の景氣の指數に從ふものと見做し得る。即ち私を以て見れば、貨幣の流通速度なるものによつて表現せらるゝ所の「景氣」そのものは、總ての經濟量の變動を指導するの立場に在る。換言すれば「景氣」は經濟活動の總ての形象を代表する所のものである。

景氣の象徵に關しては、多くの學者によりて種々のことが說かれる。物價と金利と失業者數との指數が夫々に景氣を表現するものと見らるゝことは一般的であるが、其他に於て普通に認めらるゝ所のものは、資本財の生產と消費の量である。殊にシュピートホフ等によりては、資本財の代表物として鐵の生產と消費とが擧げられる。又景氣の變動を生產過剩によつて說明せんとする、ツガン・バラノウスキー等によつては、財の

蓄積量が景氣の象徴として重要視せられる。不景氣時に蓄積が始まり好景氣時に在貨が増加し其の極恐慌に至る)。

併しながら、鐵の生産量を以て景氣を卜せんとするが如きは誤りである。蓋し經濟の正常なる生長が、鐵の生産と消費とをして特に大ならしむるが如き場合あるが故である。元より景氣變動を示す爲の指數に於ては、經濟生長に關する長期的變動又は一般的趨勢(Trend)の量は除却せらるべきであるが、それにしても尙鐵と云ふが如き特殊貨物の經濟量は景氣を示すものとしては不充分である。

次に貨物蓄積量の大小も亦右と同樣の見方により景氣の眞の表現者と看做さるゝに困難である。鐵に就ても又一般貨物に就ても、それ等のものの蓄積量と取引量との間の割合の大小が景氣に關係するものと見られなければならない。

物價と金利とはよく景氣を表はすものと看做され得る。併し既に云ふが如く、物價と金利とは最もよく私の所謂貨幣價値の指數に隨伴するものなるが故に、此兩者は之を幣價値指數によつて代表せしめることが出來る。

スナイダーは、銀行預金流通速度の指數がよく貨物取引高の指數に一致することを述べ、而して預金流通速度の景氣觀測に對する効果の大なることを說く(C. Snyder, Business Cycles and Business Measurements, p. 144)。

併しながら私の見方に於ては、それは逆である。預金の流通速度こそそれ自體において景氣そのものである。貨物取引量はそれの絶對量に於ては景氣の表現者たり得ない。貨物の取引量は唯だ貨物存在量との割合に於てのみ、よく景氣の指示者たり得る。

六

然らば次に、私の所謂景氣を現はす所の景氣指數と、他の指數との間の關係は如何であるか。即ち私は下に過去十五年間に亘る所の我國に於けるこれ等の指數を示し、以て其間に於ける景氣の變動を觀察したいと考へる。

年次	景氣指數(一)	物價(二)	金利(三)	鐵(四)	在貨(五)
大正五	二、一〇	一三五、〇	一、三	六七	一五、九
六	二、五七	一六五、〇	一、四六	七二	一七、四
七	二、五九	二二五、五	一、六七	九〇	二四、一
八	二、五〇	二三八、四	一、九六	一〇六	二八、五
九	二、二四	二五六、四	二、六	一〇七	二四、五
十	二、〇四	一九九、四	一、九二	八八	二七、四
十一	二、二四	一九七、九	二、六	一〇二	二三、六
十二	二、〇九	一九八、六	二、四〇	一一四	一七、〇
十三	二、二三	二一一、八	二、五〇	一二六	二〇、〇
昭和十四	二、二一	二二五、七	二、三	一二四	一五、五
一	二、二九	一九二、九	二、一五	一五二	一八、三
二	一、七八	一八一、二	一、八五	一七四	二〇、二
三	一、五九	一七六、三	一、四六	二〇九	一九、九
四	一、二九	一七一、五	一、四五	二一七	二二、三
五	一、五二	一四一、一	一、四九	—	二一、二

(一) 景氣指數とは貨幣流通速度の指數であるが、茲に掲ぐる所のものは眞の

指數ではなきのみならず、大體に於て未だ不完全なるものである。即ち其はたゞ全國銀行の各月末の金銀在高の年平均數を以て、全國銀行の各月末に於ける現金及手形の出納高の年平均數を除したるものである。併し兎に角、右の數字によつて我國に於ける貨幣流通速度の大體の傾向が知り得られると思ふ。

（二）物價は大正二年の平均を一〇〇とする、東洋經濟社調査の東京卸賣物價指數（各年平均）である。

（三）金利は東洋經濟社調査の東京市場、商業手形割引日歩の月中平均に基く年中平均日歩である。

（四）鐵とあるは銑鐵の生產及輸入量の總計である（單位一萬瓲）。

（五）在貨は、全國營業倉庫に於ける各年十二月末に於ける在庫貨物の箇數である（單位十萬箇、三菱倉庫調査）。

右の中、眞の指數は物價指數のみである、他のものは所謂指數ではない。

以上、數字の材料は總て之を東洋經濟新報社編纂の「日本の景氣變動」上卷第三編の統計表に取る。

景氣變動の階程を、シユピートホフに從つて上向、回復、繁榮、資本缺乏、恐慌、不況進行、の六つに區分するものとすれば、大正四年が上向の年であり、大正五年が回復の年であり、六、七、八の三ケ年が繁榮の時期であり、八年末より九年の初めに亘つてが資本缺乏の時であり、九年の四月以後の數ケ月間が恐慌の時期であつたと見ることが出來る。

大正九年以後の景氣に就ては、大正九年の恐慌以後今日までは尙不況進行の時期に屬するものと見ることも出來るのであるが、併し見方によりては、大正十三年より昭和元年にかけて微かなる景氣の回復があり、昭和二年よりは一段と甚しき不況進行の時期に入れるものと看做すことが出來る。

何れにしても、大正五年六年の頃は景氣上昇の時期であり、昭和二年以後が景氣沈滯の時期に屬することは、爭はれざる事實である。右の二つの期間の間には「景氣」そのものゝ勢ひに關しては實に雲泥の差があつたと見ることが至當である。然らば右の表の數字の中、何が果してよく右の二つの期間の間に於ける景氣の相違を示しておるであらふか。

鐵の生產及輸入量と在庫貨物量との數字は、景氣に背離すること甚しきものである。即ち昭和二年以後の沈滯期に於て、それ等のものの數字は大正五六年頃の上昇期に於けるよりも甚しく增大しておる。併しながらそれは當然である。我國の經濟は、今日に於ては大正五年頃よりも膨脹しておる。殊に鐵に就ては建築樣式の變化が、それの生產量に大なる影響を及ぼしておる。景氣不景氣と經濟の自然の生長とは別問題である今日にては經濟は生長してはおるが併し景氣は惡いのである。

右によつて見れば、資本財の生產量とか貨物の蓄積量の如きものは、それの絕對量の變化そのものが決して景氣を語り得るものではないことが知り得られる。

次に物價と金利とは如何であるか。若し物價指數が景氣の好惡を指示し得るものならば、昭和五年は大正五年よりも景氣が良好であつたと云はなければならぬ。併しながら、彼の大正五年、企業者にも勤勞者にも所得增加の希望が溢れておつた大正五年の景氣が、悲觀と絕望との影が經濟界を陰氣にした昭和五年の景氣よりも惡るかつたとは如何にして言ひ得やうぞ。斯くして景氣の象徵として最も重きを置かるゝ所の物價指數と雖も眞に「景氣」そのものゝ姿を如實ならしめ得るものなりや否やは甚だ疑はしい。

金利に就ても亦物價指數に於けると同樣のことが言ひ得る。而して賃銀に就ては茲には其數字を擧げなかつたが、これ亦それが一の價格であると云ふ點よりして、景氣其ものの指示者としては物價と同樣の不充分さを持つものと看做し得る。

獨り私が右に揭ぐる所の景氣指數（それは即ち貨幣の社會的主觀價値の指數の逆數であるが）に就ては、以上諸多の數字に關するとは異りたることが云ひ得られる。即ち私は曰ふ、大正五年前後の上昇期と昭和二年以後の沈滯期とに於ける景氣の表示、而して右二つの時期に於ける景氣の比較、それ等のことを體驗ある經濟人に向つて指示し、而も彼をして首肯せしめ得る所のものは、獨り右に謂ふ所の景氣指數のみではないであらふかと。

右表の景氣指數によれば、大正七年平均の二、五九が最高である。併しながら今之を各月に就て見るときは最高點は大正八年中に在つた。今七、八、九の三ヶ年に亘りて景氣の消長を見るに、七年は五月に指數二、八五がありて同年の下半期は好景氣であつた。但し十一月より景氣は下降し、大正八年五月まで景氣は熱する所がなかつた。八年六月には併し指數は二、八一と上り其後數ヶ月間に亘る所の景氣の奔騰を暗示した。高景氣の絕頂は八年九月であつて、指數は二、八八であつた。

大正九年に入つては、二月の指數二、八二を最高として、四月の轉落時には既に指數は二、二八となつた。而して九月には指數一、七六と云ふ景氣の沈銷ぶりを示した。

右に依て見るに右の年間に於て物價の最高點は大正九年三月の指數三一五、八であつたが、併し余の見方によれば景氣の最高點は大正八年九月（景氣指數二、八八）に存在したと云ひ得る。

私の見方によれば、貨幣の社會的主觀價値は物價に對して時間的に原因の關係に立つ。從つて私の所謂「景氣」は常に物價に少しく先立つ。

七

以上によつて、私は「景氣」と云ふ漠然たる常識的の言葉を一の經濟學上の概念に收め、而してそれに一の統一ある量的の表現を與へんとするの試みを不充分ながら成し遂げたと考へる。

尙私は茲にては未だ景氣變動の原因と云ふ問題には關はつてはおらぬ併しながら景氣の概念を考究することは、一面に於ては景氣變動の原因を探求することである。故に私は最後に、私の所謂景氣概念の決定は、結局景氣變動の原因を何處に求めしめんとするものなりやに就て一言することの必要を感ぜざるを得ない。

問題とする所の景氣即ち一般的の景氣とは、企業家、純資本家、賃勞者の三種の社會に於ける夫々の景氣を一律に綜合したる景氣である。故に一般的の景氣不景氣の中には、右三種の社會に於ける異りたる景氣が含まれる。換言すれば貨幣に關する社會的の價値感情は、以上三者の社會に於て夫々異りたる變動の大さに於て存在し得る。右の如きは蓋し、生產物價格に對する金利と賃銀との「ラグ」(Lag) 即ち「後れ」が存在することに原因する。

生產物價格と生產要素の價格との間の變動の不一致又は不均衡、それは或學者によつては、景氣動の原因そのものであると見られ、他の學者によつては景氣變動原因に對する一の條件であると見られる。併しながら私はそれを以て景氣變動の原因そのものと見る所の前者の立場に從ふ

—（第一七頁へ續く）—

ハイデイガーのカント解釋（承前）

講師　菅　守　常

（一）形而上學の基礎づけの湧源

認識一般と特に認識の有限性の本質との解釋は次の點を明らかにしたのであつた。

有限なる直觀、即ちうけ入れると云ふ仕方に於ける直觀（感能性）は有限なるが故にそして、それが直觀であるかぎり、悟性によつて規定されなければならない。

しかもまた一面から見れば、それ自身すでに有限なる悟性は、直觀に依存してゐる。カントは云ふ。「何となれば私たちは、私たちの言葉に對應するものを直觀のうちにもたないやうな、いかなるものをも會得しないからである」（A二七七）しかも、カントが、「これら二つの性質（感能性と悟性）は、いづれをもつて他に優されりとすることは出來ぬ」（A五一）といふのをきくと、これは、彼が認識の基礎的特性を何んといつても直觀に置いたといふことを矛盾してゐるやうに見える。然しながら有限なる認識の本質統一（本質構造）に感能性と悟性（會得性）とが共に缺くべからざるものとして屬するといふことは、思惟がそれに先行する表象としての直觀に基づくといふ構造的層成に於いて、一つの順位の成立してゐることを、排除するものではなくしてむしろこのことを含んでゐるのである。それ故に、私たちがカントの問題提出方法の最も內面的な進み方に近づき得るためには、感能性と悟性とが認識に缺くべからざる要素であるといふ考察から生ずるこの兩者の相屬性に心を奪はれてこの順位を見逃し、かくて形式と內容といふ同じ重點をもつものゝ相關にぼかしてしまふことは許されないのである。（註）

註、この考へ方は極めて重要である。後の發展を理解するのに缺くべからざる點である。私は私の心おぼえのために西田哲學からこれに類似する考へをここに二三書とめて置く

「例へば智識の形式に對しては內容がなければならぬ。假令兩者合一して一つの全きものが考へられるにしても、此の如きものが映される場所がなければならぬ」（A）

「認識の成立する場所に於いては、形式と質料とが分たれるのみならず兩者の分離と結合が自由でなければならぬ」（B）

「特殊と一般との關係には自ら判斷の主語と述語の關係を含まなければならない」（C）

「AとB「場所」C「認識對象の論理的構造」

有限なる認識の可能性がそれから發現するみなもと即ちそれの湧源をいかなる點に溯つて求むべきであるかといふ問ひに對して、この認識の構造を分析して二つの要素に還元すれば單にそれで充分であるやうに見えるでもあらう。ましてカント自身が明瞭に、私たちの認識の「發現」を「心性の二つの源泉」に基づけてゐる以上一層しか見えるであらう。即ちカントは云ふ「私たちの認識は、心性の二つの源泉から發現する。」

その第一は表象をうけとる分限(註)(印象の感受性)その第二は、これ等の表象によつて一つの對象を認識する分限(概念の自發性)である。

註、Vermögen と云ふ言葉は、能力と譯されてゐる。能力といはれる以上作用概念なしには考へられない。このことから樣々の考へ方が自から混合してくるのではないであらうか、それは本來あることをなし得る狀態にある、その力を有つてゐること、を意味してゐて、得る得ないといふことは後から或はその結果を意味する。逆に考へれば或る能力を結果と見てそれのもとを指示する言葉ではなからうか、それで私は、「持ちまへ」と云ふ言葉がこれにあたると思ふ。「持ちまへ」が所有を意味し、所有が財產を意味し、財產をもつ人を分限者と呼ふ脈絡もともにこれから會得し得られると思ふ。私は漢字にあてる必要上「分限」として置いた。和辻氏はこれを効能(くのう)と譯してゐられる。

なほ一層鋭くカントは云ふ。「この二つの認識のみなもと(感能性と會得性)との他はいかなるみなもとも私たちはもたない」(A二九四)

然しながら、このみなもとが二つあるといふことは、決して、それがばらばらに並んであるといふことではない。それらの構造によつて豫じめ規定せられてゐるところのこの二つのみなもとの合流のうちに、それの合流の仕方のうちに於いてのみ有限なる認識はこの認識の本質が要求するところのものたり得るのである。この二つのみなもとが合流して一つになるなり方は決して、このみなもとを一たび發してしかる後にこれらのものが一緒になると云ふ仕方ではない(それは、みなもとそのものの合流ではない)逆に、この二つのみなもとを合流せしむるところのもの(かかる綜合)は、この二つのみなもとを共に湧き出でしむることによつてこの二つのものが相通じてをり、共に一つのもとから湧き出してゐるやうにせしむるものでなければならないのである。さてしかるに有限なる認識はそれの本質をまさに、この二つの源泉を湧出せしむる根源的な綜合(合流)にもつてゐるとするならば、形而上學の基礎づけは有限なる認識の本質根源にまでせまり行かなければならないのであるかぎり、これは大ざつぱに「二つの源泉」があると云ふとき既にこのことがこの二つの源泉の湧底をこれらの根源的な統一を探るべく指示してゐることを會得せずにはゐられないのである。

そこでまたカントも、純粹理性批判の序論に於いても決論に於いても單に二つの源泉を枚擧するに止まらずして、進んで注目すべきこれらの特性づけをやつてゐる。

「ただこれだけは序論或ひはまへおきに必要であるやうにみえる——私たちの認識には二つの莖がある。それは恐らくは一の共通な、私たちにはしかし知られない根から生じたもので、感能性と會得性である。前者によつて私たちに對象が與えられ、後者によつてそれが思惟せられる」(A一五)

「ここで私たちは、單にあらゆる認識の純粹理性からの原理による建築案を設計するといふ私たちの仕事の完成をもつて滿足する。そして一般的な根が、私たちの認識の力に交はり二つの莖を芽生えしむる點のみから出發する。この二つのうちの一つは理性である。私は理性をば最も上層的な認識の分限と解する。そうして合理的なるものを經驗的なるものに對立せしむる」(A八三七)。この場合經驗的なるものとは、經驗に於ける受容性、感能性そのものを意味してゐるのである。

この場合、二つのみなもとは、一つの共通の根から發するところの二つの莖と考へられてゐる。之に反して前の場合には「共通の根」が「恐

らくは」といふ言葉をもつて呼ばれてゐるのに反して、後の場合には、實存するものとして「一般的な根」と云ひあらはされてゐる。しかもこの二つの場合ともいづれも同様に、この根が指示せられたに止まつてゐるのである。カントはこの根を探索しやうとはしなかつたのみならず、それを「私たちには知られない」とすらいひあらはしてゐるのである。この點に於いて、カントの形而上學の基礎づけの一般的性格に本質的な一つのことが明らかになつたのである。即ち、この基礎づけは、最一の命題及び原理ともいはるべきもののもつ、白日の如き明證へ導くものではなくして、むしろ意識して「不可知」のうちに導き「不可知」のうちへ覗きこませるのである。それは、eine philosophierende Grundlegung der Philosophie である。

（二）存在論の基礎づけの諸段階の先記

形而上學の可能性を明らかならしむるためには、先づいかにして先天的綜合が可能であるかといふことが、それが現に可能であるやうなすがたに於いて示めされねばならない。このためには、先天的綜合がそれに基づいてのみ可能的であるところのものがそこから發現してゐるその發現のおほもとまで遡つてこのおほもとから明らかにされなければならないのである。即ち先天的綜合の內面的可能性の本質が規定せられるとともに、この本質の根源がその湧源からあらはされなければならないのである。

有限なる認識の本質が何に基くかといふ解明（うけ入れるといふ仕方に於ける直觀とそれ故にそれが必然的に會得されるために規定されなければならないといふこと）及び有限なる認識はいかなる源泉に發現するかといふことの表示（感能性と會得性）のうちに、私たちは既にこの認識の本質根源（この二つの源泉を合流せしむるもの）が露出さるべき次元をば劃して來たのであつた。しかもかくすることによつて、同時に、（一見うけ入れるといふ仕方のやうに見える）先天的な綜合的認識の內面的可能性への問ひが一層尖鋭化されて來ると共にまた一層解き難く縺れたものとなつて來たのである。

これまで既に述べて來た形而上學の基礎づけの問題の分析に於いて次のことがらが明かになつてゐる。即ち、

存在するものの認識は、存在するものの存在の仕組が、この認識のまへに既に認識されてゐなければならない、即ち存在するものの認識は、これに先だつてこの存在するものの存在の仕組がその存在の經驗以前に既に認識されてゐることによつての可能であるといふことである。さて有限なる認識――それの有の純粹なる要素の根源的な本質統一、即ち純粹顯相的綜合とはいかなる性格をもつかが顯示されなければならない。この綜合は、純粹直觀をいはばアプリオリに規定するいつたやうなたちのものでなければならない。この綜合に屬する概念は、單にその概念としての形式のみならずそれの內容から見られても、あらゆる經驗に先つて發現しなければならないのである。このことのうちには、綜合に必然的に缺くべからざる純粹述語的綜合は全く特異なたちのものであるといふことが含まれてゐるのである。それ故に、存在論的綜合としての先天的綜合の問題に於いては「存在論的述語」の本質への問ひが中心點を占めなければならなくなるのである。

純粋顯相的綜合の本質統一の內面的可能性への問ひは、それ自からによつて、一層遡つて、この綜合の內面的可能性そこから發現してゐるところの根源を顯らはならしめなければならないやうにかたられるのである。純粋綜合の本質を、それの根源から露出せしむることによつてはじめて、いかなる程度に於いて存在論的認識が、存在的認識の可能性の制約であるかといふ洞觀が生じて來るのである。これによつて、存在論的眞理の本質がその全幅にわたつて劃せられるのである。

存在論の基礎づけはそれゆえに次の題目によつて示めされる五つの段階を歷進する。即ち

（一）純粋認識の本質的要素
（二）純粋認識の本質的統一
（三）存在論的綜合の本質的統一の內面的可能性
（四）存在論的綜合の內面的可能性の根源
（五）存在論的認識の全面的な本質的規定

——（未完）——

—（第一三頁よりつゞく）—

即ち私によれば、一般的景氣の轉換は三種の社會に於ける景氣（貨幣價値感情）の不一致に基きて發生する。

好景氣の逆轉は、警戒を忘れたる企業家の景氣が純資本家（銀行が之を代表する）並に賃勞者に於ける逆傾向の景氣に衝突することによつて惹き起される。ビグーはこれを樂觀の錯誤（Errors of optimism）と云ふ言葉を以て說明し、高田博士はこれを合理的なる經濟的惰力の錯誤と云ふことによつて說明せんとし、而してホートレーは之を銀行信用の緊縮と云ふ具體的事實に飜譯せんとする。

尤もビグーの樂觀の錯誤は主として、商品市場に於ける需要供給の狀態が企業者の見込を裏切る場合であり、高田博士の經濟的惰力の錯誤は企業者の景氣が賃銀の「後れ」に原因する所の賃勞者景氣の逆傾向に裏切られることを意味してゐる。之に反してホートレーの金融說は專ら、企業者景氣と純資本家の景氣との不一致を意味してゐる。

以上何れにしても、諸家の說く所の景氣變動の原因は、私の言葉を以てすれば、これを階級的又は部分的景氣の不一致と云ふことに引き直すことが出來る。

景氣の階級的對立は、企業家景氣に對する純資本家並に賃勞者の景氣と云ふ關係であるが、企業家景氣の行過ぎに對して作用する所の力は主として純資本家の景氣なりや、又賃勞者の景氣なりやと云ふに、其は時と場合とによりて異るのであつて、一概には言ひ得ざる點である。併し乍ら私は景氣の下降に關しても上昇に就ても企業家景氣を訂正し、又は裏切るものは寧ろ純資本家景氣であることが普通であると考へる。

——（未完）——

ケインズの基本方程式（三）

——貨幣理論に於ける新提説について——

講師　森川太郎

目次

一、緒言
二、貨幣及貨幣價値の意義
三、定義及び若干の補説
四、基本方程式
五、方程式の要點
六、均衡の條件
（以上既載）
七、因果の序列—銀行利率の作用
八、批評的附言—結語

七、因果の序列—銀行利率の作用

物價平準に關する諸要素の均衡を明かにしたる今は、物價平準の變動に於て、これ等諸要素の相關係する因果的方向を概説すべき段階に達した。而して此因果關係を追ふに當つては先づ銀行利率の變化より出發するを便とする。蓋し銀行利率は貨幣的事情の變動に於ける起動的要因なるが故である。固より物價平準其ものに對しては、銀行利率は寧ろ第二次的に作用する。それが第一次的に影響するは基本方程式の第二項、即ち貯蓄と投資との比率である。貯蓄と投資との均衡は銀行利率の變化に依つて、或ひは破られ、或ひは回復せしめられる。此事は又やがて基本方程式の第一項、銀行貨幣の量、流通速度等々に影響を及ぼすであらう故に銀行利率が物價平準に作用する過程の因果的連鎖を跡づけることが當面の問題となるのである（註一）。

先づ混亂を避ける爲めに一應銀行利率の意を明かにして置かう。銀行利率（Bank-rate）とは一定の時、一定の市場に於て、短期資金の貸借に對し、實際に課せられる諸種の利子率の總稱である（註二）。これに對し長期資金の貸借に就きて實際に支拂はるゝ一群の利子率がある。これを証券利率（Bond-rate）と呼ばう。而して銀行利率と証券利率とが相合して市場利子率（Market-rate of interest）を形成する。大體に於て銀行利率と証券利率とは一樣に變動するから、其處に全體としての市場利子率の動きが見られ得る。さて物價平準に關し一の均衡が成立せる時、銀行利率從つて一般に市場利子率が騰貴したとする。此事は如何なる結果を生ずるであらうか、便宜上四の段階に分ちて考へる。

第一段階　銀行利率の騰貴は、先づ貯蓄を刺激し同時に投資を差控へしむることに依つて、貯蓄と投資の均衡を覆す。利子の騰貴が貯蓄を促進することは殆ど説明を要しないであらう。但し其程度は大でない、特に短期間に就いて見る場合に於ては。これに反し利子の騰貴が投資を阻害することに就きては若干説明を加へねばならぬ。總じて利子率の騰貴は投資財物價平準の下落を惹起す。何となれば、投資財の價格は其投資財が將來獲すであらうところの見込收益を一般の利子率を以て資本化したる額である。故に其見込收益にして變化なき限り利子率の騰貴は當

然に其資本化額即ち投資財價格を下落せしむるからである（註三）。投資財物價平準の下落は云ふまでもなく全體としての投資額を減少せしめ、これは他方貯蓄の增加と相俟つて、貯蓄對投資の均衡を破ることになる『一般的に云へば、銀行利率騰貴の直接の且つ第一の結果は、投資財の物價平準Pの下落並びに貯蓄の增加である。——但し兩者の內數量的には前者の方が一層重要である』(Vol. I, p. 204)。

第二段階　(一)投資財の生產高が減少する。何となれば投資財物價平準の下落に伴ひ、投資財生產者の利潤はマイナスとなり、其生產が手控へられるであらうから。(二)消費財の物價平準Pが下落する。其故はかうである。即ち貯蓄の增加はそれだけ所得の消費支出を減じ、從つて消費財の購入に向けられる所得部分が減少するからである。

茲に一應注意すべきは、市場利子率の騰貴が若しウイクゼルの所謂自然利子率の騰貴に適應して生じたのであつたならば、斯くの如き變動が一切生じないことである。蓋し自然利子率の騰貴とは投資財より生ずる見込收益の增加を意味し、これが市場利子率の騰貴に適應する限り、投資財の價格は變化せず從つて貯蓄と投資の均衡も破れないからである。

第三段階　(一)消費財物價平準Pは更に下落する。何となれば投資財の生產縮少に伴ひて、此生產に參加せる生產要素の一部は遊離せられ(即ち勞働者は失業し)、それに應じて社會に放出せらるゝ所得の額は減少し、從つて消費財の購入に向けられる所得部分は更に減少するからである。此事は基本方程式から必然に導き出される。(二)故に此段階に及んでは、(A)消費財物價平準及び投資財物價平準即ちP及びP'の下落(B)其結果としての企業者階級全體の損失、(C)其爲めに企業者が現在の賃收率に基ゐて計畫する生產要素雇傭高の減少が生ずることを知らねばならぬ。

第四段階　最後に漸增する失業の壓迫に依つて、——恐らくは相當長時日の經過したる後に——勞働者の賃收率が下落する。此能率賃收率の下落が銀行利率騰貴の及ぼす全作用の歸結である。茲に至つて物價平準の均衡が再現する（註四）。故に銀行利率引上げの効果は單に物價平準の下落（デフレーション）を生じたるのみを以てしては完成せりと云ひ難い。何故ならば物價平準下落するも、賃收率尙以前と同樣の高さを保つ限りは、企業者は常に損失を蒙り生產を縮少する結果、益失業を增大せしむるであらうから。此時に於けるプロフイツト・デフレーションがインカム・デフレーションに移行して、始めて銀行利率騰貴の効果は完成するのである（本誌第九十六號第二五頁註四參照）。

以上銀行利率の變動が生ずる因果關係的作用を、其騰貴の場合に就きて略述した。下落の場合は此反對と考へてよい。簡潔を期する爲めに今は後の場合に言及せぬ。

次に銀行利率の變動が對外均衡に及ぼす作用を見やう。銀行利率の騰貴は直接にL即ち對外貸付額に作用してこれを減少せしめる。云ふまでもなく銀行利率の騰貴は對外貸付を國內の貯蓄に移動せしめるからである。これに反しB即ち貿易差額（此場合は輸出超過額）には銀行利率の騰貴は直接に作用せぬ。けれども銀行利率の騰貴がやがて國內に於ける投資額、物價平準、利潤、賃收率に作用して（上述の如く）、これ等を減少せしむるに至れば、國內の生產費が外國の生產費に對し相對的に低下するが故に、輸出增進し、輸出超過額即ちBは結局に於て增大する傾向

を有する。斯くて若しLがBを超過し金の流出を見つゝある際に銀行利率の引上げが行はれたならば、Lは減少しBは増加して互ひに接近し、終にB＝Lの均衡を現出して金の流出を止めしむるに至る。又B＝Lの時に銀行利率騰貴すればL減少、B増大の結果金の流入を見るに至るであらうが、金の流入は現在の金本位制度の下に於ては、國内金融狀勢の緩和從つて銀行利率下落の要因となる（註五）。尙此場合金の流入が如何なる程度まで繼續するやは、一に外國に於ける銀行利率、物價平準の高さ等に依存するのであつて、茲に公式的に論定するを得ない。

更に銀行利率と貨幣數量及び物價平準との關係に就きて一言しやう。吾々の場合貨幣數量とは銀行貨幣の量である（本誌第九十五號第三七——八頁參照）。然りとすれば自由なる金融市場を前提とする限り、一定の銀行利率は明かに一定の銀行貨幣數量と相關々係に立つ。而して銀行貨幣の量は又生産物の數量、賃收率、利潤率、各種預金の流通速度等の諸要因とも密接なる關係を有するのであるが、これ等の諸要因こそ、既述の如く、直接に物價平準に作用する。然るにこれ等の諸要因は又銀行利率の變動に依つて直接に影響せられるのである。『それ故に銀行利率の變動に依つて物價平準が動く時、それは銀行利率の變動が銀行貨幣の量を變化せしめた爲めなりと稱へるのは正當でない。特に此言が、物價平準の變動は銀行貨幣量の變化に大なり小なり比例するとの意味を含めて、語らるゝ場合に於ては一層然りである』(Vol. I, p. 217)。即ち銀行貨幣の量は銀行利率と直接の關係を有つとするも、物價平準は銀行利率が前記諸要素に與ふる影響の態樣に依つて、其變動の範圍、程度を異にし、銀行貨幣の量とは直接の關係を有たぬ（註六）。云はゞ銀行利率の變化が諸要因を通じて物價平準を變動せしむるのであつて、貨幣數量は其銀行利率と一定の關係を保つと云ふに過ぎぬ。故に物價の安定の爲めには必しも貨幣數量の一定たることを要せず、或場合には却つて其變化が必要なのである。

（註一）銀行利率が物價平準に及ぼす作用過程を系統的に述べたる文獻は從來殆ど見當らなかつた、其間に在つて K. Wicksell の Geldzins und Güterpreise, 1898 は最も推賞さるべき著作である。一般に銀行利率に對して有たれる觀念を大別すれば(A)これを以て銀行貨幣の量を統制する一手段と見る Marshall, Giffen, Pigou, Hawtrey 等の立場と、(B)これを以て、對外貸借の規制を通じ國内の金準備を保護する手段と考へる多くの實際家、Goschen, Bagehot 等の思想及び(C)これを以て少くとも或種の投資に影響を與へ、やがて物價平準に響くとなす Wicksell 及び Cassel 等の見解の三とするを得る。而して最後の見解は略自らの意見に等しとケインズは謂ふ (Vol. I, pp. 185—200)。

（註二）等しく短期資金の貸借と云つても、手形割引によると當座貸越によるとに從つて利子率は一定しない。又手形割引にしても其手形の種類例へば一流手形、二流三流の手形、擔保附手形、銀行引受手形等々によりて、これに適用せられる割引率はそれ〴〵異る。茲に銀行利率と云ふは一定の時に於けるこれ等各種の利率の一般的平均率を指すのである。

（註三）此理法を例示する爲めに、ケインズは利率の下落率と等しき率にて證券價格が騰貴することを述べてゐる (Vol. I, p. 203)。しかし此叙述は不正確である。何となれば利率の下落率と元本の騰貴率とは、内割と外割の關係から必しも同率とはならぬからである。例へば利率が二分の一とならば元本は二倍となるが、二分の一となつたことは五〇％の下落で

あるに反し、二倍となつたことは一〇〇%の騰貴である。尤も此差異は利率騰落の率が僅少なる場合には無視し得るかも知れない。しかし實際に於ける利率の騰落率は此差異を無視し得る程小ではないのである。

（註四）然るに利子も亦生産要素の所得の一形態である。而して利子率の騰貴が結局勞働賃收率の下落に落ち付くと云ふ此推論は、資本所得の增加は勞働所得の減少を招くとなす分配理論の一系統――特に最近所謂勢力説に依つて此關係を强調せられる高田博士の分配理論を想起せしめる（高田博士、經濟學新講、第四卷、第六二―三頁其他參照）。

（註五）反對にBがLを超過して金が流入しつゝある時には、銀行利率を引下ぐることに依りて兩者の均衡を回復せしむるを得る。何となれば銀行利率の低下はLを增進し、同時に國內物價平準の騰貴を通じてやがてBを減少せしめるであらうから。尙ケインズはイギリスの事情に基きBを以て輸出超過額、Lを以て對外貸付額と考へて立論してゐるが、國に依りては其貿易事情よりBを輸入超過額としなければならぬ。其時にはLは當然對外借入額となり矢張りB＝Lの均衡が成立する。此均衡を中心としての銀行利率の作用も本文の記述より自ら推論し得るであらう。されば實際には銀行利率を對外均衡調整の手段として用ふること屢であり、從つて前述の如く銀行利率を以て國內の金準備高を調整する唯一の政策的手段なりとする解する論者も出づるに至るのである。

（註六）斯くて銀行利率の變動は、基本方程式を構成する各種の要素の變化を通じて物價平準を變化せしめる。而して此新物價平準を維持するに要する銀行貨幣の量は、諸要素變動の事情に依りてそれ〴〵異る。即ち一の物價平準に對應し得る銀行貨幣の量は種々であり得る。これに關する例示的な場合の説明は原著第一卷第二一七―九頁に詳かであるが茲には省略する。

八、批評的附言――結語

以上數項に亙つてケインズの基本方程式に關する理論の大要を紹介し終へたのであるが、尙それの學説的地位を見究める爲めに、若干の附言をなして小稿を結び度いと思ふ。

抑も貨幣の價値又は購買力とは端的に云つて貨幣と財一般との交換比率である。一定單位の貨幣に對して幾何の財が與へらるゝやが問題の中心であり、其處では交換取引に於ける不斷の對立者として、貨幣の流れと財の流れとが思惟の表面に浮び上る。從つて一方貨幣を以て單に他財の購買手段としてのみ所有せられるものと見、他方一般財貨を近代經濟組織の下に於ては生産せられたる後、一度は必ず販賣せらるべき運命に在るものと觀するならば、一社會に流通する貨幣の量と財貨の量との相對的比率から、やがて兩者の交換比率即ち貨幣の價値又は購買力が測定せられ得と考へられる。從來多くの貨幣數量説は主として此觀念から出發してゐた。

然るに相對立する貨幣と財貨の二つの流から、所謂貨幣價値の測定に近づくの道は、仔細に見れば尙二つある。一は其靜態に就いて眺めんとする方法であつて、即ち先づ一定の時點をとり、其時社會に存在する貨幣（主として要求拂銀行預金）の量を集計して、これに其時社會に存在する財貨のストックの總高を對比せしめ、其比率に依つて貨幣の價値を測定せんとするものである。此方法の根本的觀念は恐らく次の點に存する。即ち一定時點に於ける貨幣並びに、財貨の存在量は、何れも一定期間內に於ける兩者の流通量即ち現實の取引高に對して一定の割合を保つ

従つて存在量に於ける兩者の比率は、一定期間内に於ける兩者流通量の比率即ち取引の爲めに買手より賣手へ移動したる貨幣の總量、對、賣手より買手に移動したる財貨の總量の比率を示す、此比率即ち貨幣の價値なりと云ふにある。ケインズ自身が曾つて『貨幣改革論』に於て主張したる方程式$n=pk$（註一）及び所謂ケンブリッジ學派の代表者たるピグー教授（Prof. Pigon）の稱へる方程式$P=\frac{kR}{M}$（註二）は何れも此タイプの貨幣價値方程式である。けれどもこれ等の方程式は共に其成り立ちに於て明かなるが如く、結局現金在高と財貨のストック量との比率であつて眞の意味の貨幣の購買力を示すものではない。それが何等かの意味に於て貨幣の價値を測定するものとすれば、前に述べたる現金殘高標準（Cash-balance Standard）をあらはすものであらう。

次に今一つの方法は貨幣の價値を取引の動態に於て測定せんとする試みであつて、即ち一定期間内に於ける取引高に就き、現實に流通したる貨幣量と財貨量とを直接に對比し、其比率に於て購買力を把握せんとするものである。一般に知られたるフイシャーの方程式 PT＝MV は其代表的なるものであらう。云ふまでもなくMは貨幣量、Vは其流通速度をあらはすのであるから、從つて MV はフイシャーの言葉を借れば一定期間内に於ける貨幣の支出（"expendifure"）の總額をあらはし、Tは同期間内の取引量（Volume of Trade）をあらはす。故に此時はP茲に謂ふ貨幣の購買力を示すものにあらず、寧ろかの現金取引標準（Cash-transaction Standard）を表示する。唯此方程式の一長所は、MVが大體に於て銀行の手形交換高に該當する爲め、實際の統計に應用し易い點であるが、其意味に於ては又 PT を實際の數字に當てはめるに困難なりと云ふ缺點を有つ。

從來の貨幣價値方程式の構成方法と其難點は凡そ以上の如くであつた然らばこれに對してケインズの基本方程式は何事を主張し得るか？ケインズ自身は云ふ。吾人の方程式も單なる等式であつて、それ自身では貨幣價値に關する因果の說明を與へざる點に於ては他の諸方程式に同じ。又方程式を構成する諸要素に對し統計的に實際の數字をあてはめることの容易ならざる缺點に就きても他と同樣である。しかし少くとも次の二點に於て長所を有つと云ひ得るであらう。即ち（一）先づ何よりも人々にとつて眞の問題であるところのもの、即ち貨幣の購買力（消費財の物價平準）並びに生產物全點の物價平準を目的として方程式を導き出したこと、及び（二）方程式構成に當り意を用ひて、量的のみならず質的檢討の目的にも適合する如くに、要素を分析、配列し、以て貨幣現象の因果的解明殊に近時の重要問題たる信用循環の究明に便したること、これである（Vol. I, pp. 221—2）と。

賢者は能く己を知る。ケインズが自らの基本方程式に對する前記の立言も、簡にしてよく其得失を捉へたものと謂ふを得るであらう。しかしケインズの此自己批判に對し筆者は尙二三の駄足を附け加へ度い。

先づケインズ新提說の特長として、第一に擧ぐべきは、彼が物價平準を種々の平準に類別して論を構へたる事である。蓋しこれに依りて貨幣事情の變化が惹き起す諸變動の眞の姿並びにそれの意義を、容易に且つ明確に知るを得る。例へば貨幣事情に變化起りて物價が騰貴する時、其物價騰貴の態樣は、云ふまでもなく、凡ての財貨の價格が同時に一樣に騰貴すると云ふのではない。種々の物價は其騰落に遲速があり又其程度

も一様でない。其處に問題があり、貨幣事情の變化が一般經濟の均衡を擾す所以がある。若し凡ての物價が同時一様に騰貴するのであるならば物價騰貴は單に從來と同量の取引をより大なる貨幣單位に於て行はしむること以外に、何の意味を有ち得ないであらう。一般に高物價（high prices）が問題にあらずして、物價騰貴（rising prices）が問題なりと云はるゝ意味は即ち此處に在る。然るに屢行はるゝ如く、單一なる一般物價平準を目標に貨幣價値方程式を構成する時には、此關心すべき物價騰貴の態様を明かにするを得ない。これに對してケインズは何よりも先づ（一）消費標準又は貨幣の購買力（The Consumption Standard）、（二）卸賣標準（The Wholesale Standard）及び（三）勞働賃收標準（The Earning Standard）を類別した（本誌第九十五號第三八—九頁參照）。これ等三物價平準は其騰落の遲速と程度とを著しく異にし、從つて諸種の問題を發生せしめる要因となるものである。さればケインズがこれ等三物價平準を消費財物價平準（P）、新投資財物平準（P′）、及び勞働一單位當りの貨收率（W）として、其方程式中に取り入れたことは、問題を眞に把握する爲めに方程式の効果を特に大ならしめたものと云はねばならない。ハイエクは最近の著作に於て『一般物價の說を最早問題とせず、貨幣事情の變化が各種財貨の相對的比價に及ぼす影響を說く貨幣理論こそ來るべき發展段階に於ける貨幣論である』と云ふ意味のことを述べてゐる（註三）が、ケインズの新提說は、前記の意味に於て、正にハイエクの謂ふ來るべき貨幣論の門に第一歩を踏入れたる說なりと云ふを得るであらう。但しこれに關しケインズがジエヴオンズ流の貨幣價値概念を排斥する論難は餘りに强きに過ぐる嫌がある。既にして各種物價變準の構成を認むる以上は、財貨全體に亙る一般物價平準構成の可能をも認めてよいではないか。現にケインズが第二基本方程式に用ふる生產物總體の物價平準（Π）は、取りも直さず一般物價平準であらう。尤もジエヴオンズの如くこれを貨幣の固有價値と解すべきか否かは問題であらうけれど、これとて畢意は用語の問題である。立場を異にすればこれを貨幣の固有價値を見得ずと云ふことはない。從つて貨幣に固有價値の如きものは一切存在せず、ジエヴオンズは徒らに蜃氣樓を追ふものとなす（Vol. I, p. 86.）は、言少くとも極端に過ぐる。

第二の特長は方程式の構成に當つて、單純に貨幣數量乃至貨幣の流通速度等の要素を用ふることなく、其代りに注意深く合目的々に分析整理せられたる所得（E）、利潤（Q而してこれは更にQ_1、Q_2の二部分に分たれる）、貯蓄（S）、投資（I及びI′）等の要素を用ひた點である。これ等の要素はこれを適當に組合すことに依つて、貨幣量又は貨幣の流通量に該當せしめ得るのみならず、又價格論的に見ても明かに各種物價の構成要素である。故にこれに依つて物價變動に於ける貨幣的變動の過程と意義とを明かにし得る。例へばインフレーションの場合、其原因と意義とを知る爲めには、方程式の何れの要素にインフレーションが生じたるか換言すればそれがキヤピタル・インフレーションなりや、コムモデイテイ・インフレーションなりや將又インカム・インフレーションなりやを見ればよい。又これを以て或程度まで變化の推移を跡づけ得る。即ちインフレーションならばキヤピタル・インフレーションに始つてコムモデイテイ・インフレーションを經、インカム・インフレーションに落付くのが常則である。從つて現在の過程から次に起るべき變化の豫測をも立て

得る。唯此點に關する缺點と見るべきは、ケインズ自身も認むる如く、方程式を實際の數字にあてはむるに當つて、個々の要素に該當する統計的數字を得るに困難なることである（註四）。

第三の特長は物價變準を變動せしむる貨幣的要因として利子率が導き入れられたことである。物價平準の變動を利子率にかゝわらしめて見ることは、稀にウイクゼルの如き先蹤者ありとは云へ、尙貨幣理論に於ける一新境地の開拓たるを失はぬ。筆者としては差當つて、ケインズが利子率と物價平準との關係に就きて引き出せる結論に對し、何等かの言をなす用意を缺くが故に、其論述の要旨を摘記せしを以て滿足するの外ない。唯一點筆者不敏にして今一段の明解を望む點は利子率と貨幣數量との關係である。蓋しケインズに依れば、既にも述べたる如く、利子率は貨幣數量を經て物價平準に作用するのでなく、又物價平準を經て貨幣數量に影響するのでもない。即ち利子率は一方物價平準に直接的に作用すると同時に、他方貨幣數量とも直接の關係を有つ。然るにケインズは利子率と物價平準との關係はこれを詳說するに反し、利子率と貨幣數量との關係に關しては唯一定の關係ありと云ふのみ。利子率が物價平準を通して貨幣數量に作用すと云ふならば即ち止む、然らざる限り此利子率と貨幣數量との關係、進んで一定の利子率の下に於ける物價平準と貨幣數量との關係が一應說明せられなければならぬ。ケインズの所論は此關係を充分に說明してゐない。

以上ケインズの貨幣論第一卷の四篇中基本方程式を中心とする第二、第三の二篇の大要を簡說し終へた（註五）。原著に於ける論述の進め方は英國式に可成り自由であつて、論の及ぶところの問題に關しては、著者は常に一應の解明と一家の見とを開示してゐる。これは云ふまでもなく貨幣金融問題に關する著者の該博なる知識と、其煥發の才能との致すところであるが、同時に又其爲めに理路の曲折を徒らに繁くしたる傾きなしとしない。筆者の非才固よりであるけれども、尙著者自らが序に於て『若し始めからやり直したならば、より良く且つより短くなすを得たであらう』（Vol. I, pp. v-vi.）と云へる言葉に若干の同感を禁ずるを得なかつた。故を以て小稿著者の意を傳へて誤りなからんことを期するが如きは寧ろ不可能であらう。私かに庶幾するところは唯これを機緣として先學の叱敎を俟ち、以て筆者自らの蒙を啓かんことである。——完——

（註一）$n=pk$ に於て n は總貨幣數量、p は物價平準即ち貨幣の價値、而して k は消費單位の數、消費單位とは各種の消費財を消費上の重要さに從ひてウエイトを附し、適當に組合せたる一種の組合せ財の單位の意（詳細は Keynes, Monetary Reform, 1923, pp. 76—7 參照）である。此方程の主たる誤りは本來所得預金に對應せしむべき消費單位に對して、總貨幣量（事業預金 business-deposits をも含む要求預金總額）を對應せしめたる點にある。蓋し消費財購入の爲めに用意せらるべきものは總預金額でなくして、所得預金額なるが故である。

（註二）$P=\frac{kR}{M}$ に於て R＝實物所得總量、k＝實物所得總量に對する實物所得殘高の割合、從つて kR は實物所得の平均殘高、M＝紙幣數量、P＝物價平準。此方程式に對しても $n=kp$ に就き註一に於て述べられたる批難が其まゝあてはまる（尙此方程式に對する詳細なる批判は Vol. I, pp. 231—3 參照）

（註三） F. A. Hayek, Prices and Production, 1931, p. 26

——（第三七頁へ續く）——

學内報

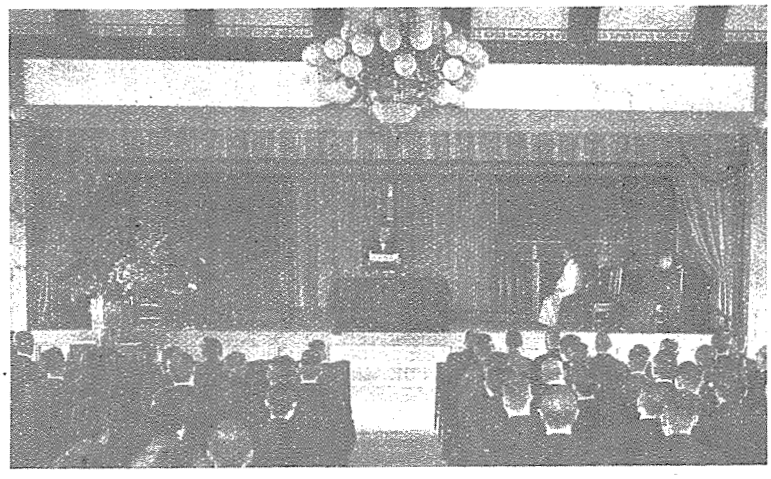
卒業式豫告

大學學部第八回卒業式は本月二十日午後二時より千里山學舍講堂に於て、專門部第四十四回卒業式並に附屬關西甲種商業學校第十七回、第二商業學校第七回卒業式は同日午前十時より天六學舍講堂に於て擧行する。

威德館落成式

前號所報の如く、本學では畏くも　聖上御即位の大禮を擧げさせ給ふに方り、京都皇宮内に建造せられたる饗宴場の一部御下賜の光榮に浴したので、これに基き千里山學舍敷地内に千數百名を收容し得る講堂と演武場とを兼ねたる記念館建設の計を樹て、大林組の手にて昨年八月起工、工事を急ぎつゝあつたが、いよいよその竣成を見るに至つたので、本學ではこれを威德館と名附け、二月二十八日同館に於いて落成式を擧行した。

春尚淺き千里丘上、この日朝來清快なる日和に惠まれ、和やかなる微風も本學の榮光を壽ぐかと思はれ、第四師團司令部附中村少將、田崎神戸商業大學長、堤大阪工業大學長、隈本大阪高等學校長、江口天王寺師範學校長はじめ、朝野貴紳の來賓、校友其他關係者の參列多數に及び、その莊重盛大なる擧式は實に感激溢るゝものがあつた。先づ式は齋主の修祓献饌、祝詞奏上等型の如く進められ、撤饌を終つて仁保學長の式辭に移る。ついで砂川理事の祝辭、喜多村理事の工事報告、工事請負人表彰あり、それより宮内大臣、文部大臣、第四師團長、大阪府知事、大阪市長の各祝辭あり、いとも嚴粛裡に式を閉ぢた。



威德館落成式（仁保學長の式辭）

尚式を終つてさゝやかなる祝宴を張り、聖恩のいや高く、威德極まりなきを仰ぎ、聖壽萬歲を壽ぎ奉ると共に、榮ある本學の前途を祝福して午後零時半散解した

左に當日の式辭、祝辭の主なるものを摘錄する。

式辭

昭和大禮記念館移築ノ工ヲ竣リ、茲ニ本日ヲ以テ、之ガ式典ヲ擧行ス。乃チ閣下及諸賢ノ賁然トシテ來リ臨マルルヲ得テ本學ノ榮光モ亦大ナリ。龜松明リニ學長ノ職ニ在ルヲ以テ敢テ辭ヲ陳ベテ賓客及ビ師生諸子ニ告グ

謹デ惟ミルニ今上陛下睿哲明聖夙ニ東宮ニ在シテ震德海外ニ顯ハレ既ニ大政ヲ攝シ給ヒテ聲教遐方ニ覃ブ、卽位ノ三年大禮ヲ京師ニ擧ゲ茲ニ天日ノ明光ヲ嗣ギ一系ノ大統ヲ承ケ給ヒ以テ大嘗ノ祭賜宴ノ儀ニ至ルマデ乃チ肅ミ乃チ嚴カニ上下七千萬民齋シク萬歲ノ祝ヲ献ジ南北數千里穆悉ク瑞嘉ノ誠ヲ致セリ。儀終ルノ明年十月一日其儀禮ノ場二百二十坪ヲ以テ本學ニ下シ賜ヘリ。學ノ内外上下抃躍シテ相慶シ其光華ヲ矜リ其殊寵ニ感ジ、奔走シテ之ガ移築ヲ計リ、乃チ地ヲ學館ノ北此ノ高爽ノ處ニトシ工ヲ大林組ニ命ジ六年八月九日ニ始マリ今年二月十日ニ至リテ其事全ク終リヌ　謹テ命ジテ威德館ト曰ヒ以テ記念講堂トナシ　又以テ武ヲ練ルノ處トナサントス。

窮カニ惟ミルニ天祖始メテ大寶ヲ定メ祝ヲ天壤ノ窮無キニ質シ給ヒシヨリ以テ神武天皇ニ至リ都ヲ中土ニ奠メ元ヲ記シ統ヲ垂レ給ヒ列聖相承ケテ今上陛下ニ至ル世タル一百二十四、年タル二千五百九十二、之ヲ世界ニ求ムル

ニ一ノ以テ比スベキナク大禮ノ嚴ニシテ肅ナルモ亦　皇祖ヨリ傳ヘテ今日ニ至リキ則チ此館ニ上ル者一タビ念ヲ大禮ニ致スノ時ハ則チ二千六百年ノ大統ヲ念ヒ天地ト窮無キノ皇運ヲ念ヒ皇道ノ宏遠ナル國體ノ尊嚴ナル其念油然トシテ心ニ湧キ以テ生ヲ皇國ニ稟ケタルノ樂ヲ覺エンコト必セリ又武ヲ此館ニ練ル者皇祖肇國ノ大略ヲ念ヒ今上威武ノ聖德ヲ仰キ先民忠烈ノ遺風ニ範トク以テ氣ヲ義勇ニ養フノ概アランコトモ亦必セリ。嗚呼千里ノ丘巍然タル此館長ヘニ本學教養ノ表試トナリ以テ皇運ヲ萬年ニ扶翼スルヲ得ンコレ余ノ至願トスル所ナリ乃チ一言ヲ陳ベテ式辭トナス

昭和七年二月二十八日

關西大學學長　仁保龜松

祝辭

關西大學ハ曩ニ大禮盛宴場一部ノ下賜ヲ請ヒ大禮記念館トシテ威德館ヲ構築シ本日ヲ以テ茲ニ落成ノ式典ヲ擧行セラルルニ至レルハ慶賀措カサル所ナリ．顧フニ國家ガ學校ニ期待スルモノ其ノ能ク人材ヲ養ヒ國用ニ供スルヲ以テナリ　今ヤ國家ハ空前多事ノ局ニ當リ而カモ國民ハ無前多望ノ機ニ臨メリ此ノ最大難局ヲ打開シ此ノ一大好機ヲ把握シ進ミテ國家千年ノ長計ヲ建ツル一ニ人材ノ輩出ニ俟ツナリ　本大學創立茲ニ年アリ其ノ間有爲ノ人材ヲ養ヒ以テ國用ニ供シタル蓋シ鮮少ナラサルベシ余ハ今後益々師生一心交ヲ講シテ以テ其ノ德ヲ養ヒ武ヲ演シテ以テ　其ノ威ヲ立テ濟々タル多士出テ、國家ノ用ニ供シ是館ヲシテ威德ノ名ニ負カサラシメンコトヲ翹望スルモノナリ

此レヲ以テ祝辭ト爲ス

昭和七年二月二十八日

宮內大臣　一木喜德郎

祝辭

關西大學ハ曩ニ下賜セラレタル御大禮建造物中ノ一部ヲ以テ記念館造營ノ計ヲ樹テ客秋工ヲ起シ今春成ルヲ告グ規模宏大樣式典雅以テ禮ヲ肆フベク以テ武ヲ講ズベシ名ヅケテ威德館ト謂フ自今日夕出入殊恩ヲ感佩シ聖德ヲ景仰セバ心身ノ修養ニ資スル所蓋シ莫大ナルモノアラン爰ニ新築落成ノ典ヲ擧ゲラルヽニ臨ミ一言所懷ヲ述ベテ本學ノ前途ヲ祝福ス

昭和七年二月二十八日

文部大臣　鳩山一郎

祝辭

昭和三年聖上親シク京都ニ臨幸御卽位ノ大禮ヲ擧ゲサセラル　國民ノ感激謂フ所ヲ知ラサリキ　關西大學ハ御大禮建造物ノ一部御下賜ノ光榮ニ浴シ移築工ヲ竣ヘ威德館ト名ヅケ本日茲ニ盛大ナル式典ヲ擧行セラル誠ニ慶賀ニ堪ヘザル所ナリ　惟フニ輓近世道人心ノ推移ハ眞ニ憂慮ニ耐ヘザルモノアリ　此秋ニ方リ本學ノ青年學徒聖堂ニ集リ鴻恩ヲ仰キツヽ學德ヲ研磨シ身心ヲ鍛練セントス洵ニ本學ノ爲メ欣幸祝福ノ念禁セザルナリ　翼クハ御下賜ノ聖旨ニ副ヒ本館ノ偉容ト相俟ツテ愈々本學ノ聲譽維レ揚リ學界ノ雄タランコトヲ聊カ蕪辭ヲ述ベテ祝辭ト爲ス

昭和七年二月二十八日

第四師團長　伯爵　寺內壽一

祝辭

關西大學威德館ノ工事竣成ヲ告ゲ本日ヲ以テ落成ノ式典ヲ擧行セラルルニ會スルハ洵ニ慶祝ニ禁ヘザル所ナリ

本館ハ畏クモ　今上天皇陛下曩ニ御卽位ノ大禮ヲ擧ゲサセ給フニ方リ京都皇宮內ニ建造セラレタル饗宴場ノ一部ヲ下賜セラレ之ニ基キテ新築セラレタルモノニシテ最モ意義深ク記念スベキ建物タリト謂フベキナリ惟フニ輓近文運ノ進展著シキモノアルノ一面世俗漸ク輕佻ニ流レ國民ノ思想動モスレバ其ノ嚮フ所ヲ窺ラントル虞ナシトセス此ノ秋ニ際シ本館ヲ建設シテ學生神身ノ練磨ニ資シ以テ教育ノ本旨ヲ不斷ニ培ハントスルハ洵ニ時宜ヲ得タルモノナリト信ス由來關西大學ハ創立已ニ久シク校風年ト共ニ隆ク校模月ヲ追フテ揚リ今ヤ關西ニ於ケル學府ノ一大殿堂トシテ重キヲ爲セリ　而シテ茲ニ本館ノ建設ヲ見タルハ今後學生訓育ノ上ニ一段ノ效果ヲ齎スベキヲ信シテ疑ハス翼クハ克ク本館建設ノ趣旨ヲ体シテ研鑽精勵以テ聖恩ニ對ヘ奉ルニ遺憾ナカランコトヲ聊カ蕪言ヲ叙シテ祝辭トス

昭和七年二月二十八日

大阪府知事　齋藤宗宜

祝辭

本日茲ニ威德館ノ新築竣成シ盛大ナル落成ノ式典ヲ擧ゲラルヽニ當リ一言祝辭ヲ述ブルハ余ノ最モ欣快トスル

所ナリ惟フニ新館ハ昭和御大禮ノ際畏クモ饗宴場ニ當テサセラレタルモノノ一部ニシテ其ノカミ朝野ノ貴顯ガ綺羅星ノ如ク立並ビ聖壽萬歲ヲ壽キ奉リタル所而シテ皇室ノ教育ニ大御心ヲ用ヒサセ給フ事ノ篤キ特ニ之ヲ當大學ニ下シ賜ヒシモノニシテ寔ニ由緒深キ大禮記念ノ建造物ナリ嗚呼聖恩洪大而シテ大學ノ面目光榮甚ダ大ナリト謂フ可キナリ　當大學ハ風光絶佳ノ地ニ位シ校運隆々長キ歷史ヲ有シ幾多ノ人材ヲ輩出シテ我ガ國文化ノ爲ニ貢獻セラルル極メテ大ナルモノアルハ既ニ世人ノ周知スル所ナリ而シテ學生諸君朝夕此館ニ出入シテ聖德ヲ仰ギ研鑽ヲ勵ム所アラバ校風益々振作シ更張シテ我ガ文運ヲ助クルコト更ニ大ナルモノアルヤ必セリ果シテ然ラバ今日ノ歡ビハ啻ニ當大學ノ爲メノミナラズ國家ノ爲ニ眞ニ慶祝ニ堪ヘサルナリ聊カ以テ祝辭トス

昭和七年二月二十八日

大阪市長　關　一

祝辭

昭和大禮記念館構築ノ工ヲ竣ヘ茲ニ本日ヲ以テ落成ノ典ヲ擧グ理事等ヲ代表シテ一言ノ祝ヲ致サントス　惟フニ國朝即位ノ大禮ハ天日嗣ヲ三千年ニ繼承シ大寶位ヲ唯一系ニ統御シ給フノ慶典ニシテ之ヲ宇内萬國ニ求メ之ヲ内外古今ニ通ジテ共ニ比スルナキノ盛儀ナリ　今上天皇明哲睿聖既ニ宸極ニ御シ給ヒテココニ三年十一月十日此大禮ヲ京師ニ行ハレ樺太ノ北臺灣ノ南島風ノ及フ所歡抃雀躍シテ萬歲ノ祝ヲ奉ラザルハナク聖德遐暢ニ布キ風化海隅ニ及ベリ本館ハ即チ當時饗宴場ノ一部ニシテ其明年宮内省ヨリ之ヲ本學ニ下賜セラレタルモノナリ本學ノ此命ヲ拜スルヤ衆皆寵榮ノ大ナルニ感激シ謀ヲ協セ意ヲ悉シ我ガ國體ノ精華ナリ以テ我ガ萬世一系ノ皇室ニ奉スルコレ皇國ノ天下ニ巍立シテ旭日ト其輝光ヲ比スル所以ナリ今此館以テ大禮ノ盛儀ヲ記念シ國體ノ尊嚴ヲ証徵ス乃チ此堂ニ上ルモノ義勇忠孝ノ念油然トシテ中ニ起リ以テ國體ノ尊ヲ省ミ奉公ノ志ヲ厚ウセバ學風大ニ興リ敎化尤モ美ナランコレ實ニ恩賜ノ慶ニ報ユル所以ニシテ獨リ理事者ノ望ム所ナルノミニアラザルナリ萬歲ノ祝聲長ク千里ノ高邱ニ遷リ以テ敎道ヲ永遠ニ扶護センハ豈ニ慶スベキ至ナラズヤ乃チ謹テ祝覔ヲ致ス

昭和七年二月二十八日

關西大學理事　砂川雄峻

衆議院議員當選

去る二月二十日行はれたる衆議院議員總選擧に際し本學關係者にして當選の榮を擔ひたる者左の如し

大阪　板野友造氏（明二九法、協議員）
岡山　小川鄕太郎氏（舊講師）
大阪　勝田永吉氏（舊講師）
鹿兒島　金井正夫氏（講師）
秋田　田中隆三氏（舊講師）
愛知　瀧正雄氏（舊講師）
大阪　内藤正剛氏（明三七法、理事）
茨木　内田信也氏（評議員）
兵庫　野田文一郎氏（明二七法、協議員）
廣島　藤田若水氏（推）
兵庫　小林絹治氏（大二專法）
兵庫　清瀨一郎氏（舊講師）
大阪　廣瀨德藏氏（明三四法、協議員）

之ガ移構ニ勉メ遂ニ今日ノ竣成ヲ見ルニ至レリ乃チ以テ記念講堂トナシ又以テ演武ノ場トナサントス蓋シ義勇公ニ奉ズルハ我ガ國民ノ精神ニシテ忠孝美ヲ濟セルハコレ

住所移動

大鐘彦一氏（協議員）
天王寺區大道一丁目一五七

吉田一枝氏（敎授）
豐能郡豐津村垂水六八〇ノ七

加藤金次郎氏（助敎授）
豐能郡豐津村垂水、幼稚園筋向ヒ

向軍治氏（講師）
西宮市宮西町六一、河崎仁兵衛方

高山岩男氏（講師）
京都市左京區北白川久保田町八

威德館建設基金寄附者芳名

（一口金五圓也）

口數	氏名
一	海景宥氏
一	入江眞太郎氏
一〇	岩崎卯一氏
一	泉井久之助氏
一	磯部喜一氏
一〇	原田康太郎氏
二〇〇	仁保龜松氏
二	西村信雄氏
一	西村嘉三郎氏
二	本莊鐵次郎氏
二	豐岡佐一郎氏
一	德尾俊彦氏
一	茶谷忠治氏
一	茶谷勇吉氏
一	大山彦一氏
二	野村次夫氏
一	大坪一氏
一	大橋光雄氏
一	和田豐治氏
一	川元英二氏
一	片山正直氏
一	加藤金次郎氏
二	河村信一氏
一〇	神宅賀壽惠氏
二〇	賀來俊一氏
二	賀屋俊雄氏
二	吉田一枝氏
六〇	田邊信太郎氏
一	田邊清市氏
一〇	武內省三氏
二	武田鼎一氏
一〇	武田藏之助氏
一	瀧谷善一氏
一	田中保太郎氏
二	坪內士行氏
二	中谷敬壽氏
五	中村鄂次郎氏
一〇	村上喜眞氏
一〇	內多精一氏
二	山田正三氏
一	矢日孝次郎氏
一	柳瀨兼助氏
二	正井敬次氏
四〇	增山忠次氏
一	古川武氏
二	藤澤章次郎氏
一	フインチャー氏
七	小泉幸治氏
一	赤羽豐次郎氏
二	安藤光氏
一	作田莊一氏
一	佐々木惣一氏
二	齋藤武生氏
二	齋藤常三郎氏
二	木村健助氏
一	柚木馨氏
二	三枝樹正道氏
一〇	水谷揆一氏
一〇	宮本英脩氏
一〇	新町德之氏
二	森下政一氏
一	森川太郎氏
二	關豐馬氏
一	杉平顯智氏
一	粟谷廣一氏
一	朝山亮太郎氏
一	荒井秀雄氏
一	安達榮治郎氏
二	淺野弘道氏
二	安藤藤綱氏
一〇	有田秀造氏
二	坊農寅吉氏
四	千葉次郎氏
一	千代原秀雄氏
一	出口幸市氏
一	古莊一雄氏
四	藤田辰藏氏
一	藤倉音松氏
一	藤井恒治郎氏
一	古本德次郎氏
一	福田譽助氏
一	福井由吉氏
一	藤井雅太郎氏
三	深川澄夫氏
一	古田吉五郎氏
三	藤井義成氏
一〇	藤田和夫氏
一〇	藤田實雄氏
六	後藤武夫氏
二	後藤田國三氏
二〇	後藤德太郎氏
一	濱龜松氏
一	堀田耕吉氏
一	廣瀨壽久氏
一	萩原吉太郎氏
一	長谷川福藏氏
二	堀本治作氏
二	林音吉氏
二	日昔市治郎氏
一	橋田佐太郎氏
一	濱井正三氏
一	堀場子代氏
一	林喜平氏
一	東山善之助氏
一	林忠三郎氏
二	本位田勝三氏
二〇	平尾縫太郎氏
二〇	堀啓次郎氏
一	平岡啓道氏
二〇	萩原敏隆氏
二	平野七郎氏
一	橋本萬三郎氏
二	羽田英三氏
二〇	池尾芳藏氏
一	生野利一氏
一	井上辰次郎氏
一	池田三治郎氏
一	石原時成氏
二	今岡正雄氏
一	池田茂穗氏
二	入江光治郎氏
一	入江平次郎氏
一	伊藤善三郎氏
一	伊豆藏梅次郎氏
二	岩崎清次郎氏
二	糸島實太郎氏
一	木正光氏
二	井口角十郎氏
一	池田一道氏
一〇	板垣不二男氏
一	石川登氏
一	岩尾康氏
一	石元常雄氏
一	入江清一氏
一	石橋茂一氏
一	石川良助氏
一〇	池谷龜太郎氏
一〇	板橋菊松氏
一	久保林兵衛氏
一	北村脩藏氏
二	笠谷熊吉氏
一	倉賀野渉氏
一	小林末松氏
一	桑原義人氏
一	國分逸郎氏
一	川崎政次郎氏
一	加茂正雄氏
二	近藤倉太郎氏
一	清洲鉄藏氏
一	勝丸俊一郎氏
一	楠本彌太二郎氏
一	黑田卯三郎氏
一	工藤虎平氏
一	金子文作氏
一	國科喜兵衛氏

一 小坂井茂市氏
一 木寺 章氏
一 河野通雄氏
一 川畑半三郎氏
一 近藤信太郎氏
一 垣内兼吉氏
二 門前元吉郎氏
一 小西榮吉氏
二〇 川崎齊一郎氏
一 小林儀三郎氏
四〇 喜多村桂一郎氏
四〇 黒田莊次郎氏
三 神原寅之助氏
一 小寺小市郎氏
一 木下幸平氏
一 河内龜與志氏
一 北大路四郎氏
一 加古仁介氏
二 河合重雄氏
二 兒玉善吉氏
一 小西太一氏
四 小林正喜氏
一〇 小池義一氏
一 松村平五郎氏
二 美濱久纜氏
二 木山彦一氏
一 水谷幾三氏

一 水谷之一氏
二〇 水谷政次郎氏
二 牧田嘉太郎氏
一 三谷久子氏
二 丸尾新治郎氏
一 森本德藏氏
一 眞木壽一郎氏
二 增田辰治郎氏
二 宮本善兵衛氏
一 松井庄三郎氏
一 松村清七氏
一 村田政氏
一〇 村山龍平氏
一 增本喜一郎氏
一 俣野榮次郎氏
一 村田經志氏
一 松本正太郎氏
一 松本好晴氏
一 森木正治氏
一 增本長三氏
一 森山正之助氏
二 村井新太郎氏
一 三澤英氏
一 松原與三郎氏
一 森里辨太郎氏
二 松本靜史氏
四 三宅政右衛門氏

一五 村尾靜明氏
一 松永廣太氏
一 森美之助氏
五 森岡保喜氏
一〇 三森武雄氏
一〇 松澤卓規氏
二〇 南莞爾氏
一 中井武兵衛氏
二 中尾熊吉氏
一 長田利三郎氏
一 中井米藏氏
二 中谷吉次郎氏
一 中西長次郎氏
二 中村嘉一郎氏
一 中澤晴三郎氏
一 西澤吉次郎氏
一 西野由太郎氏
二 西川常之亟氏
一 溟岡具雄氏
一 西田稔氏
二 中島隆藏氏
一 西田源三氏
二 野口定次郎氏
一 中村公夫氏
二 野原稔氏
一 中村公男氏
一 中川賢一氏

一 仲井弼氏
四〇 内藤正剛氏
一 野口茂樹氏
一 西田磯次郎氏
一〇 中場彌太郎氏
二 岡田熊二郎氏
一 大竹清次氏
一 岡部鷹太氏
一 岡崎由藏氏
一 奥野修氏
二 岡崎二三氏
一 押川長三郎氏
二 大野喜代治氏
一 大西伊吉氏
一 岡村房七氏
一 岡本誠太郎氏
一 荻野美照氏
一 越智保二郎氏
一 小田切延壽氏
二 小野繁幸氏
二 大隅末廣氏
一 荻野圭三郎氏
一 岡本勝治氏
一 大竹房太郎氏
三 小笠原譜咲氏
二〇 遠部邈太郎氏
一 鶯池勉氏

一 尾合藤一氏
一 岡田利雄氏
二 大塚壽延氏
二 奥川政吉氏
一 小橋松次氏
四 大村喜覺氏
二 瀨喜代太氏
一 佐々木熊吉氏
一 庄司源藏氏
二 角倉敷安氏
一 芝重太郎氏
一 佐々木治郎氏
一 澤安吉氏
一 篃萬重太郎氏
二 佐々順吉氏
一 島田藤藏氏
一 杉田直男氏
一 坂戸幸三郎氏
二 佐藤廣吉氏
二 佐野巳之助氏
二 杉岡藤右衛門氏
一 志方甚之助氏
三 角田好太郎氏
二 錫谷小平氏
一 杉木由太郎氏
一 潮海實治氏
四〇 砂川雄峻氏

一 酒井鶴之助氏
二 佐々木高吉氏
一 猿丸辨治氏
二 志野覺治郎氏
一 嵯峨根令氏
二 濱田俊介氏
一 世良傳九郎氏
四 齋藤政太郎氏
一 島村芳雄氏
二〇 作間耕造氏
一 津野邊慶三郎氏
一〇 高島俊治氏
一〇 德岡喜壽郎氏
一 辻原弘氏
一 伽耍三郎氏
一 高橋高藏氏
二 戸田平三郎氏
二 手塚太郎氏
一 玉置千代松氏
一 高橋熊次郎氏
一 竹内龜之亟氏
二 橘庄太郎氏
一 高戸一恕氏
一 武村房治郎氏
一 竹垣初治氏
一 立入伊三郎氏
一 田畑和之助氏
一 多治見眞孝氏

一 塗矢松之助氏
四 高橋孫十郎氏
一 高木惣次郎氏
一 玉井磨輔氏
一 田村春高氏
一 武田晴夫氏
一 竹内靜衛氏
四〇 武田宣英氏
一 武津眞彦氏
一 堤 熊治氏
二 多治見五郎氏
五 高利喬一氏
一 上田繁太郎氏
二 植田芳松氏
一 上田治雄氏
一 唄 里吉氏
一 上野醇三氏
一 和田秀雄氏
一 渡邊愼二郎氏
二 山本長兵衛氏
二 吉田音吉氏
一 山本彌助氏
一 吉川繁造氏
二 吉川岩吉氏
一 山田留太郎氏
一 山下文平氏
一 山脇七郎氏
一 山本權次郎氏

一 行平豐吉氏
一 矢富福治氏
一 山川邦男氏
一 山崎禮次氏
一 山本茂次郎氏
二 山本幸吉氏
一 吉本茂樹氏
一 吉田文十郎氏
二 山本德太郎氏
二 入鳥治平司氏
二〇 吉崎龜之助氏
一 安村竹松氏
四〇 吉田音松氏
七 吉村種藏氏
一 山崎敬義氏
一 山口辰雄氏
一 弓削多四郎氏
一〇 山口直三郎氏
一五 山本伸次郎氏
二〇 山田善之助氏
一〇 山田直三郎氏
二 吉田金吾氏
二 植谷壽秋氏
四 角田好太郎氏
四 伊藤元氏
四 藤田禮造氏
一 森寛紹氏
一 野口茂樹氏

（申込順）

校友彙報

動靜

井上 芳比氏（明三 四法） 大阪遞信局海事部遞信局事務官を辭任。

堀元嘉平治氏（大三 大法） 大阪商船會社門司支店船客係より下關驛前同社船客案內所に轉任、住所は下關市上田中町一三六〇。

納庄淸之進氏（昭四 專法） 北海道廳警察部高等警察課に勤務。

萩原 佐友氏（昭六 大經） 近衞步兵第一聯隊第七中隊に幹部候補生として入營。

移動

舟木二三二（明三二 法） 東京市外大井町出石五九四

北山 義衞（明四三專法） 東京府大崎町白金猿町九四

小野村胤敏（大六 專法） 東區博勞町二丁目六八

吉見 幸雄（大一一專法） 東京府豐多摩郡野方町下沼袋一五三

安藤 藤綱（大一一專法） 東京市小石川區關口駒井町一三

伊場 信一（昭三 專商） 東京市麻布區本村町一八七眞岡福藏方

榎 卯三郎（昭四 專文） 北河內郡住道村三箇。

改姓名

（舊） （新）

大一五專法 山本 政吉 山本 稀一。

訃報

昭和七年一月二十四日逝去

（大六專法） 住岡時三郎君

（遺族 神戶市灘區鍛冶屋二〇 住岡正敏）

校友總會竝に校友懇親會開催豫告

例年の如く校友總會竝に校友懇親會は本月二十日（卒業式當日）午後五時より大阪中央公會堂において開催することになりました。奮つて御來會下さい。

尙御出席の方は來る十八日迄に本學天六學舍宛御一報下さい。會費は金四圓當日御持參願います。

學生彙報

陸上競技部

萬國オリムピツク大會出場を待望す——不撓不屈の精神を以て精進努力をつゞけてゐる我が競技部は、今夏ロスアンゼルスに於て開催せらるゝ第十回オリンピツク大會に大島、川岸、長尾、藤枝の諸君を出場せしめることゝなり、世界の檜舞臺を目指して準備おさ〳〵怠りない。

大島、川岸兩選手は我が日本跳躍團の寵兒にして走巾跳に於ける昨年度の記錄は七米三〇、七米二二にして、三段跳は一五米四四、一四米六四、槍の長尾選手はレコード五九米一四。中距離の藤枝選手は一分五十八秒六の記錄を保持し萬國の精鋭を向ふに廻して堂々闘ふの自信と意氣とに雀躍してゐる。

親愛なる校友學友諸兄の絶大の御聲援を乞ふ。

國際聯盟關大支部

關西聯合會——一月二十四日午後一時半より本學クラブハウスに於て關西聯合委員會を開催、當番校の關學より昭和六年度の經過報告あり、次で各校明年の事業報告の後、「自由通商貿易の提唱」の議題の下に研究會自由討論を開始し約一時間半大討論を行つた。

當日の出席校は、關學、大外語、神高商、和高商、同大、本學の六校。

尚次回は五月十日前後大阪外語に於て研究會開催の豫定、議題は

「フアシズムと世界」

「滿蒙國家の樹立と國際關係」

千里山短歌會

詠草

（一月廿二日於クラブハウス）

德　弘　靜　都

妹をいむ心の奥に人しれず己が命を引きまはすあり

一ひらのこの葉のうきて池の命動きて見ゆる午の靜けさ

堀炬燵のぬくときによひてとりはめばつるしの柿はうまさもうまし

自ら身の浮き來るを感じつゝ椽に枕し目を眩りたる

胡　桃　澤　田　紀　衞

ふくよかにもりあがり來る波なるもつかみがたなき力にはある

うすれ陽に詩情の影のながかりき溫泉の街を遠くはなれて

三　宅　正　直

たえがたく鏡に見れどいたむ齒は小さき穴のありてゐにけり

磯の邊に逆卷く波の穗頭を椋めてたちつ雀の群は

廣　田　誠　男

默々と赤土の坂上り行く老母一人ありあはれ夕ぐれ

ふと出でしさ庭べの土の香の高き今日のわずかに春くるらしも

新　町　德　之

死を以て御旗まもりしますら男の勳をかたる旅團長哉

凍傷の鼻のいたみに出陣の遲くれをなげく古參兵哉

——（第二四頁より續く）——

（註四）此事はケインズ自身も認めてゐる。しかし彼は本書第二卷の第五篇、第六篇に於て、基本方程式の各項に對し、免にも角にも統計的數字をあてはめ、これに依つて計算したる結果が、實際記錄にあらはれたる物價平準の動きと略等しきことを立證してゐる。而して又方程式の各項に統計的數字をあてはめることの困難は、凡ての物價方程式に共通である旨をも論じてゐる。

（註五）これに引續いて物價動態論（The Dynamics of the Price-level）と題せられる第四篇があり、其處では基本方程式を基底とするケインズの信用循環理論が展開せられてある。恐らく理論的にも最も興味ある部分であり、且つ又ケインズ新提說の意義は此部分の解說を俟つて始めて完くせられるのであらうけれども、其仕事は別の機會に於てこれを成し遂げ度いと思ふ。

昭和六年度關西大學千里山學友會收支決算書

基本金之部

收入	区分	金額	摘要
前年度繰越金		三〇、九八六円	
新入生入學金		二、一九〇、〇〇〇	四三八人分
信託會社利息		一四、九九、六六	
計		七五九、八二	
支出			
無			
差引計金		一四、九九、六六	次年度ヘ繰越

經常費之部

收入	金額	摘要
前年度繰越金	一、三七六、一六	
第二學期分會費	六〇、〇〇	一二人分
前年度第三學期分會費	四、六三一、〇〇	一五四人分
本年度第一學期分會費	六、四六〇、〇〇	一六一五人分
第二學期分會費	七、四四〇、〇〇	一四八八人分
返戻金	二〇〇、〇〇	南條實氏布哇遠征中止ノタメ返戻金
現金利息	九一、〇七	
計	三〇、二九、二五	

支出	金額
拳闘部	六三三、〇〇
水泳部	四五五、六七
馬術部	三一六、三四
射撃部	三四九、七二
漕艇部	一、〇〇〇、〇〇
山岳部	四、六六、〇〇
辯論部	一、〇〇〇、〇〇
籠球部	一八七、四二
英語會	二六、四一
佛教青年會	二九、四〇
唐手部	一五四、三三
ホッケー部	一〇〇、〇〇
新聞部	七一四、八一
應援團	八〇、〇〇
就職聯盟費	五〇、〇〇
千里山學友會名簿印刷費	三〇〇、〇〇
大學祭費	一、〇〇〇、〇〇
應援團旗	一〇〇、〇〇
運動場一部修理費及諸雜費	二〇〇、五五
拳闘部返戻金ノ内更ニ上京費	一五〇、〇〇
計	一八、七六、七二
收支差引殘金	一、五二、五三
第四回別途積立金	一、〇〇〇、〇〇
差引殘金	五六、五三
收入	翌年度ヘ繰越
前年度繰越金	四、六八、一四
第四回別途積立金	一、〇〇〇、〇〇
預金利息	四五、七九
計	五、七四、〇三
支出	
相模部道場建設費	二、〇〇〇、〇〇
差引金	三、七三四、〇三
	次年度ヘ繰越

昭和六年度關西大學天六學友會專門部第一部收支決算書（自昭和六年一月至同十二月）

收入之部

項目	豫算額	收入額	超過額△ 不足額	備考
一、歎入會金				
一、基本金	一、一二四、〇〇	一、一二四、〇〇		
二、會費				
一、會費	四、五九〇、〇〇	四、九五〇、〇〇	△三四〇、〇〇	
三、雜收入				
一、基本金預金利子	五〇、〇〇	一〇、〇〇	△四〇、〇〇	
二、會費預金利子	六五、〇〇	六七、〇〇	△二、〇〇	
四、前年度繰越金				
一、基本金繰越金	六七二、〇〇	六七二、〇〇		
二、會費繰越金	三、〇〇	三、〇〇		
合計	六一四五、〇〇	六八〇九、七六	△六四、七六	

支出之部

項目	豫算額	支出額	超過△ 剩餘額	備考
一、歎補助費				
一、大學祭補助費	四四五〇、〇〇	四三七一、〇九	七一、〇九	追加豫算第六回大學祭
二、事業費				
一、文藝部長費	二〇〇、〇〇	二〇〇、〇〇		
二、辯論部長費	四〇〇、〇〇	四〇〇、〇〇		
三、雜誌部費	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇		
四、映畫部費	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇		
五、音樂部費	二〇〇、〇〇	二〇〇、〇〇		
六、運動部長費	三六八、一一	三六八、一一		
七、劍道部費	二〇〇、〇〇	二〇〇、〇〇		
八、柔道部費	二〇〇、〇〇	二〇〇、〇〇		
九、陸上競技部費	五九〇、〇〇	五九〇、〇〇		
一〇、相撲部費	四五〇、〇〇	四五〇、〇〇		
一一、野球部費	二五〇、〇〇	二五〇、〇〇		
一二、庭球部費	五〇、〇〇	五〇、〇〇		
一三、卓球部費	七〇、〇〇	七〇、〇〇		
一四、籃球部費	五〇、〇〇	五〇、〇〇		
一五、蹴球部費	五五〇、〇〇	五五〇、〇〇		
一六、山岳部費	二〇〇、〇〇	二〇〇、〇〇		
一七、唐手部費	三〇〇、〇〇	三〇〇、〇〇		
一八、射撃部費	二五〇、〇〇	二五〇、〇〇		
一九、學友會雜費	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇		
三、繰越金				
一、基本金繰越金	一、一二四、〇〇	一、一二四、〇〇		
二、會費繰越金	六、四五〇、〇〇	六、八〇九、七六	△六四、七六	更正豫算
合計	一二、一三、〇九	一二、一三、〇九		

昭和七年度關西大學天六學友會專門部第一部收支豫算書（自昭和七年一月至昭和七年十二月）

收入之部

項目 款	項	本年度豫算額	前年度豫算額	增△減	備考
一、入會金		九〇〇、〇〇	九〇〇、〇〇	〇	
二、會費	一、基本金	九〇〇、〇〇	九〇〇、〇〇	〇	
	一、會費	六、七五〇、〇〇	四、五〇〇、〇〇	二、二五〇、〇〇	
三、雜收入	一、基本金預金利子	九〇、〇〇	七〇、〇〇	二〇、〇〇	
	二、會費預金利子	六五、〇〇	五〇、〇〇	一五、〇〇	
		三五、〇〇	二〇、〇〇	一五、〇〇	
四、前年度繰越金	一、基本金繰越金	一、九三七、〇〇	六七五、〇〇	一、二六二、〇〇	
		一、三三七、〇〇	六七、〇〇	六六五、〇〇	
	二、會費繰越金	六〇〇、〇〇	三〇〇	五九七、〇〇	
合計		九、六七七、〇〇	六、一四五、〇〇	三、五三二、〇〇	

支出之部

項目 款	項	本年度豫算額	前年度豫算額	增△減	備考
一、補助費	一、大學祭補助費	五〇〇、〇〇	五〇〇、〇〇	〇	
二、事業費	一、文藝部長費	七、三五〇、〇〇	四、四四〇、〇〇	二、九〇七、九五〇	第七回大學祭
	二、辯論部費	六〇〇、〇〇	六〇〇、〇〇	〇	
	三、雜誌部費	三〇〇、〇〇	四五〇、〇〇	△一五〇、〇〇	
	四、新聞部費	五〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	△四〇〇、〇〇	新設
	五、映畫部費	一〇〇、〇〇	三〇、〇〇	七〇、〇〇	
	六、音樂部費	一五〇、〇〇	二〇、〇〇	一五〇、〇〇	新設
	七、語學部費	四〇〇、〇〇	二五〇、〇〇	一五〇、〇〇	
	八、運動部長費	一五〇、〇〇	一五〇、〇〇	〇	
	九、劍道部費	六五〇、〇〇	三六八、〇〇	二八二、〇〇	
	一〇、柔道部費	三五〇、〇〇	二〇〇、〇〇	一五〇、〇〇	
	一一、相撲部費	一〇〇、〇〇	四三〇、〇〇	△三三〇、〇〇	
	一二、唐手部費	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	〇	
	一三、陸上競技部費	六〇〇、〇〇	五九〇、〇〇	一〇、〇〇	
	一四、野球部費	六〇〇、〇〇	五五〇、〇〇	五〇、〇〇	
	一五、庭球部費	一五〇、〇〇	七〇、〇〇	八〇、〇〇	
	一六、卓球部費	一五〇、〇〇	一〇〇、〇〇	五〇、〇〇	
	一七、籃球部費	一五〇、〇〇	三五〇、〇〇	△二〇〇、〇〇	
	一八、蹴球部費	一五〇、〇〇	八〇、〇〇	七〇、〇〇	新設
	一九、馬術部費	一五〇、〇〇	三〇、〇〇	一二〇、〇〇	
	二〇、山岳部費	三五〇、〇〇	二五〇、〇〇	一〇〇、〇〇	
	二一、射撃部費	二〇〇、〇〇	三四五、九〇	三四五、九〇	新設
	二二、學友會雜費	三五〇、〇〇	二五四、一〇	一〇〇、〇〇	
	二三、就職運動費	六〇〇、〇〇	〇	六〇〇、〇〇	新設
	二四、應援團費	一五〇、〇〇	〇	一五〇、〇〇	新設
三、翌年度繰越金	一、基本金繰越金	一、八二七、〇〇	一、三二〇、九〇	六〇四、一〇	
	二、會費繰越金	一、八〇〇、〇〇	一、三二〇、九〇	△五五、九〇	
合計		九、六七七、〇〇	六、一四五、〇〇	三、五三二、〇〇	

昭和六年度關西大學學友會 專門部 第二部 收支決算書（自昭和六年一月 至昭和六年十二月）

收入之部

項目	款項	豫算額	收入額	超過額 △不足額	備考
一、入會金	一、基本金	二、〇〇〇、〇〇〇	二、二三四、〇〇〇	△二三四、〇〇〇	
二、會費	一、會費	一〇、一〇〇、〇〇〇	八、二二四、五〇〇	△一、九七五、五〇〇	
三、雜收入	一、基本金預金利子	四、七〇〇、〇〇〇	五、六三二、〇〇〇	△九三二、〇〇〇	
	二、會費預金利子	七〇〇、〇〇〇	四、九五、五〇〇	△六六、五〇〇	
四、前年度繰越金	一、基本金繰越金	三、〇〇〇、〇〇〇	二、〇八七、三三三	△九一二、六六七	
	二、會費繰越金	二、四〇〇、〇〇〇	二、四〇八、〇五〇	△八、〇五〇	
合計		二四、五七〇、〇〇〇	三、九九九、〇〇三	△一、五七〇、九七	

支出之部

項目	款項	豫算額	支出額	剩餘額 △超過額	備考
一、補助費	一、大學祭補助費	一、四〇〇、〇〇〇	一、五九〇、〇〇〇	△一九〇、〇〇〇	第六回大學祭
	二、校友懇親會費	四〇〇、〇〇〇	五九〇、〇〇〇	△一九〇、〇〇〇	昭和六年三月校友懇親大會出席者二九五名ニ對スル補助額（二圓宛）
二、事業費	一、幹事長費	一、〇七〇、〇〇〇	一、〇七〇、〇〇〇	〇	
	二、共濟部費	一、五〇〇、〇〇〇	一、四五三、〇〇〇	四六、七〇〇	更正豫算
	三、辯論部費	一、三〇〇、〇〇〇	一、二〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	
	四、文藝部費	五七〇、〇〇〇	五七〇、〇〇〇	〇	
	五、運動部長費	九四〇、〇〇〇	九四〇、〇〇〇	〇	
	六、劍道部費	一、三九〇、〇〇〇	一、三九〇、〇〇〇	〇	
	七、柔道部費	八二〇、〇〇〇	三五〇、〇〇〇	四七〇、〇〇〇	
	八、陸上部費	八一〇、〇〇〇	三五〇、〇〇〇	四七〇、〇〇〇	
	九、水泳部費	九四〇、〇〇〇	九四〇、〇〇〇	〇	
	一〇、相撲部費	四〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	〇	
	一一、馬術部費	二五〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇	〇	
	一二、庭球部費	三、四〇〇、〇〇〇	三、四〇〇、〇〇〇	〇	
	一三、卓球部費	二五〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇	〇	
三、繰越金	一、翌年度基本金繰越金	二、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	〇	更正豫算
	二、會費繰越金	二、三〇〇、〇〇〇	二、三〇〇、〇〇〇	〇	
合計		二四、五七〇、〇〇〇	三、九九九、〇〇三	△一、五七〇、九七	

昭和七年度關西大學學友會 專門部 第二部 收支豫算書（自昭和七年一月 至昭和七年十二月）

收入之部

項目	款項	本年度豫算額	前年度豫算額	增△減	備考
一、入會金	一、基本金	一、六〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	△四〇〇、〇〇〇	
二、會費	一、會費	八、五五五、〇〇〇	一〇、一〇〇、〇〇〇	△一、五四五、〇〇〇	
三、雜收入	一、基本金預金利子	五、五〇〇、〇〇〇	四、七〇〇、〇〇〇	△一〇〇、〇〇〇	
	二、會費預金利子	四五〇、〇〇〇	七〇〇、〇〇〇	△二五〇、〇〇〇	
四、前年度繰越金	一、基本金繰越金	一〇、七六八、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	△一、三二、六六八、〇〇〇	
	二、會費繰越金	〇	二、四〇〇、〇〇〇	△二、四〇〇、〇〇〇	
合計		二、四六八、〇〇〇	二四、五七〇、〇〇〇	△三、一〇二、〇〇〇	

支出之部

項目	款項	本年度豫算額	前年度豫算額	增△減	備考
一、補助費	一、大學祭補助費	一、六〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	△六〇〇、〇〇〇	第七回大學祭
	二、校友懇親會費	六〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	△二〇〇、〇〇〇	昭和七年三月校友懇親大會出席者三〇〇名ニ對スル補助額（二圓宛）
二、事業費	一、幹事長費	八、五五五、〇〇〇	一〇、七〇〇、〇〇〇	△二、一四五、〇〇〇	
	二、共濟部費	五、四〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	△三、九〇〇、〇〇〇	
	三、辯論部費	一、〇〇〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	△三〇〇、〇〇〇	
	四、文藝部費	五七〇、〇〇〇	五七〇、〇〇〇	〇	
	五、運動部長費	六〇〇、〇〇〇	九四〇、〇〇〇	△三四〇、〇〇〇	
	六、劍道部費	八〇〇、〇〇〇	一、三九〇、〇〇〇	△五九〇、〇〇〇	
	七、柔道部費	三〇〇、〇〇〇	八二〇、〇〇〇	△五二〇、〇〇〇	
	八、陸上部費	八五〇、〇〇〇	八一〇、〇〇〇	△三五〇、〇〇〇	當分事業停止
	九、水泳部費	九四〇、〇〇〇	九四〇、〇〇〇	〇	
	一〇、相撲部費	七〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	△三〇〇、〇〇〇	
	一一、馬術部費	二五〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇	〇	
	一二、庭球部費	三、四〇〇、〇〇〇	三、四〇〇、〇〇〇	〇	
	一三、卓球部費	二五〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇	〇	
	一四、山岳部費	〇	二五〇、〇〇〇	△二五〇、〇〇〇	新設
三、繰越金	一、翌年度基本金繰越金	二、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	〇	
	二、會費繰越金	二、三〇〇、〇〇〇	二、三〇〇、〇〇〇	〇	
合計		二、四六八、〇〇〇	二四、五七〇、〇〇〇	△三、一〇二、〇〇〇	

昭和七年度關西大學學友會專門部第二部各部豫算書

幹事長費　五百貳拾五圓也

內譯

幹事長交涉費	四〇、〇〇円
學校當局交涉費	三五、〇〇
各部長協議費	一五、〇〇
幹事章作成費	六〇、〇〇
印刷、名刺代其他	五〇、〇〇
幹事慰勞費	一〇〇、〇〇
幹事會寫眞費	四〇、〇〇
幹事會々場整理費	三〇、〇〇
懇和會費	一五、〇〇
事務局費	二五、〇〇
雜費並準備品費	一〇〇、〇〇
豫備費	三、〇〇

共濟部費　七百四拾圓也

內譯

基本金	二五〇、〇〇
下足料金	一一〇、〇〇
學友會員名簿	一六〇、〇〇
各大學共濟部訪問並ニ共濟部規約變更研究費	二五、〇〇
委員章並ニ印鑑代	六五、〇〇
委員會費並ニ諸印刷費其他交涉費	六〇、〇〇
會員投書箱	三、〇〇
貸與部調査交通費並ニ文房具代	三、〇〇
就職運動ニ要スル通信費並ニ面談費	二七、〇〇
豫備費	二〇、〇〇

文藝部員　壹千百五拾圓也

內譯

映畫研究會費	五〇、〇〇
音樂部費	一五〇、〇〇
關西論叢發行費	三三〇、〇〇
文藝祭	五〇、〇〇
委員會費並ニ委員章代	七〇、〇〇
通信、交通、文房具代	五〇、〇〇

辯論部費　壹千〇八拾五圓也

參考（昨年度豫算壹千四百五拾圓也豫算減少スルモ事業ハ縮少セズ。）

內譯

辯論部々旗並ニ遊説隊流旗作成費	五〇、〇〇
春期學內大會費（五月）天王寺公會堂	五〇、〇〇
辯士派遣費（東京、名古屋、京都和歌山、大阪、神戸、廣島、其他）	一三〇、〇〇
春期遊説費（四月）	一〇〇、〇〇
夏期遊説費（七月モシクハ八月）	二五〇、〇〇
部員章型代及委員章作成費	三五、〇〇
全國大會費（六月）中央公會堂	一九〇、〇〇
秋期學內大會	五〇、〇〇
聯盟費（聯盟主催大會）	三五、〇〇
部員練習大會、部員記念寫眞補助費並ニ委員會費	七〇、〇〇
印刷費、通信、交通、名刺、印鑑並ニ準備品及文房具費	七〇、〇〇
辯論部交涉費	三五、〇〇
豫備費	三〇、〇〇

（其他市內遊説二ヶ所、西ノ宮市、堺市、八尾ノ遊説ヲ行フ豫定、春夏兩遊説ニハ寄附金ヲ募集ス）

運動部費總額　金五千壹百五拾圓也

運動部長交涉費　金參百圓也

內譯

監督派遣費	一五〇、〇〇
委員會費	三五、〇〇
學校當局交涉費	三五、〇〇
運動部委員章代	三五、〇〇
印刷名刺代	三〇、〇〇
運動部委員寫眞代	三〇、〇〇
豫備費	三〇、〇〇

陸上部費　金八百五拾圓也

東京箱根驛傳競走	二〇〇、〇〇
全日本中等學校對抗競走	一〇〇、〇〇
冬期、春期、秋期大阪大學專門學校對抗選手權大會	六五、〇〇
萬國オリンピック大會豫選費	二六〇、〇〇
全日本學生對抗選手權大會	五〇、〇〇
岡山醫大主催關西專門學校對抗競技大會	三〇、〇〇
法政大學對抗定期戰	八〇、〇〇
關西學生對抗選手權大會	三〇、〇〇
器具費及維持費練習費	三五、〇〇

柔道部費　金八百圓也

柔道部教師費	二四〇、〇〇
大阪學生柔道聯盟費及出場費	五〇、〇〇
典武會主催第四回團體優勝大會出場費	三〇、〇〇
柔道衣購入費	八〇、〇〇
大阪有段者會出場費	二〇、〇〇
練習費（部員打合費）	五〇、〇〇
メタル部員章名刺印鑑記念寫眞代	五〇、〇〇
各地遠征費	二五〇、〇〇
雜費	三〇、〇〇
名古屋柔道聯盟對大阪柔道聯盟出場費	一〇、〇〇

馬術部費　金七百圓也

關西學生乘馬聯盟費	五〇、〇〇
定期練習費及練習補助費	一五〇、〇〇
野砲兵隊內合宿練習	三〇、〇〇
第四師團主催遠乘大會出場費	三五、〇〇
京都學生聯盟大會出場費	二五、〇〇

習志野騎兵學校主催全國大會出場費　一三五、〇〇
關西學生遠乘聯盟大會出場費　五〇、〇〇
藥專主催全關西大學高專大會出場費　三〇、〇〇
近畿乘馬大會大學對抗出場費　四〇、〇〇
懇親遠乘會費　三五、〇〇
部員章委員章記念撮影　五〇、〇〇
印鑑名刺及諸雜費　二五、〇〇
委員會部員總會費　一五、〇〇
馬具修理費補助　三〇、〇〇

庭球部費　金六百五拾圓也

內譯

試合用新ボール（十二打代一打十圓）　一二〇、〇〇
練習用新ボール（十打代一打十圓）　一〇〇、〇〇
仝　中古ボール（二十五打代一打四圓五十錢）　一二、五〇
トーナメント出場費　五〇、〇〇
庭球協會費　二〇、〇〇
全日本學生聯盟費　二〇、〇〇
コート借用費　一〇〇、〇〇
各地定期遠征費　一〇七、五〇
庭球部員章及雜費　二〇、〇〇

相撲部費　金六百圓也

內譯

大濱出場費
明治神宮出場費
法政對抗費
近畿中等學校角力大會
夏期合宿費
稽古代謝禮費
廻代遠征費
劍道部費
關西學生聯盟費　三〇、〇〇
全國學生聯盟費　五、〇〇
高專武道大會出場費　四五、〇〇
全國武道大會出場費　四〇、〇〇
教師專用道具及選手用　一五、〇〇
部員章及雜費　三〇、〇〇
各地遠征費　二〇〇、〇〇
教師謝禮費　一〇〇、〇〇

水泳部費　金參百圓也

（當分事業停止）

內譯

法政大學對抗戰（於東京）　一五〇、〇〇
仝　對抗戰準備合宿費　六〇、〇〇
大阪學生聯盟水上競技會費　五〇、〇〇
大阪學生聯盟維持費　二〇、〇〇
雜費（練習費及部員章）　七〇、〇〇

卓球部費　金貳百圓也

內譯

ボール代　三〇、〇〇
ネットボール代　一、五〇
部員總會費　五、〇〇
部員章作成費　一五、〇〇
定期戰費　二、七〇
聯盟費　三、五〇
大會出場費　三、一〇
遠征費　四〇、〇〇
雜費　四一、二〇

山岳部費　金壹百圓也

內譯

關西學生聯盟費　一七、五〇
部備附テント購入費　二五、〇〇
冬期スキー練習補助費　二〇、〇〇
ロツクタイム及夏期登山補助費　三、〇〇
第二部山岳主催山岳展開催費　五、五〇

新刊紹介

藤本浩一氏著
民謡集　うたせ船

東京　大地舍發行

民謡集「風にやつれて」の著者が二年後の今日第二民謡集として公にせるもの。收むるところ勞働民謡「うたせ船」外二十三、それらを海洋、都會、田園の各編に分ち、更に加ふるに瀬戸内海の沿岸地方を唄へる郷土民謡十二を以て居る。

大地に根ざす人間の生活そのものゝ力が、「風にやつれて」に比し、比較にならぬ程の力强さを以てにじみ出てゐる點に於いて著者のその後の動向を如實に窺ひ知ることが出來る。殊に勞働民謡の諸編は、うたせ漁師を以て自ら任ずる著者の生活に對する意氣込みを遺憾なく示すものといふべく、讀者は誰しも嘗ては新聞配達、露店商人までやつたといふ著者の「人」そのものに言はれぬ懐しさと親しみを覺えるであらう。また近くは舞踊劇詩集を出さうといふ氏の將來を期待すると共に、この際敢へて本書の一讀を江湖に薦むる所以である。

氏は昭和二年本學文學科の出身、著作にはなほ劇詩「闇に彷徨ふ」がある。何れも東京大地舍發行のものである。

（T・E　生）

第一卷　ア――カ　昭6……412/9/1
第二卷　キ――コ　昭6……412/9/2
第三卷　サ――セ　昭6……412/9/3
第四卷　ソ――ハ　昭6……412/9/4

科學

平塚忠之助編　高等力學　昭5……631/4/
同　高等物理學
第一篇　重學　昭4……630/9/1
第二篇　熱學　昭4……630/9/2
第三篇　光學　昭4……630/9/3
第四篇　波動論、音響學、物理光學　昭2……630/9/4
第五篇　電氣學、磁氣學　上卷　昭5…630/9/5-1
同　下卷　昭4…630/9/5-2
岩崎重三著　農業地質學　昭6……650/2/
今泉善夫著　元素と化合物　昭5……546/3/
Lipka, J.
浦口善爲譯　圖式及ビ用器計算法　昭6……610/11/
竹内端三著　函數論
上卷　昭5……616/1/1
下卷　昭3……6 6/1/2
山崎直方著　山崎直方論文集
前篇　昭5……650/3/1
Young & Morgan.
小倉隆譯　初等數學解析　昭6……615/1/

美術

平凡社編　世界美術全集
別卷第四卷　繪卷篇　昭6……803/2/4
別卷第十七卷　工藝篇（下）　昭6…803/2/17
鍋井克之著　風景畫を描く人々へ　大15…855/22/

文學

平凡社編　現代大衆文學全集
續第十七卷　生田蝶介集　昭6…941/6/17
續第十八卷　新選探偵小說集　昭7…941/6/18
佐々木信綱外共編　校本萬葉集
第二卷第一、卷第二　昭7…952/27/2
新潮社編　第二期世界文學全集
第九卷　白い牙　昭6…990/56/9
上田、松井共著　大日本國語辭典
卷四　に――ん　昭4……913/1/4
索引　昭5……913/1/5

寄贈圖書

中央融和事業會　下村春之助著、融和事業の話　昭6……530/7/
大連商工會議所　同所編、大連商工會議所統計年報
昭和五年度　上編　昭6…404/17/5-1
下編　昭6…404/17/5-2
池田龍藏氏　同氏編、無盡研究資料總覽　昭6……028/6/
慶應義塾圖書館　同館編、福澤先生傳記完成記念展覽會目錄　昭6……029/3/1
金融研究會　同會編、銀行集中の大勢　其二、英國の部　昭6……449/2/4
同　同會編、中華民國貨幣制度及銀問題文獻集錄　昭6…449/2/5-1
北村佳逸氏　同氏著、日本は衰へる？　昭6…1000/18/
神戸市土木部港灣課　同課編、神戸港大觀　昭6……482/31/
國際觀光局　同局編、佛蘭西のホテル貸付銀行に就いて　昭6……283/2/
松本烝治氏　同氏著、常識としての商法改正の話　昭6……376/99/
明治大學　同學編、明治大學五十年史　昭6……586/9/
內閣統計局　同局編、國勢調査報告　昭和五年度……402/11/
同　同局編、日本帝國人口動態統計　昭和五年度…404/12/10
大阪府立貿易館　同館編、大阪貿易彙纂　昭和五年度…461/38/
大阪市電氣局　同局編、電氣事業成績調書　昭和五年度……705/4/
大阪市社會部調査課　同課編、大阪市內職調査　花紙紙袋　昭6……515/113/
大阪市役所　同所編、大阪市統計書　第二十九回昭和五年度494/1/29
大阪市役所產業部調査課　同課編、支那貿易年報　民國十九年　昭6　461/30/19
大阪商工會議所　同所編、統計年報　昭和五年度……401/6/5
拓務省拓務局　同局編、英國海外移住委員會報告概要　昭6……342/10/
東京文理科大學　同學編、創立六十年　昭6……585/19/
東京府學務部社會課　同課編、小商業者の現在並其開廢狀態に關する調査　昭5……456/14/
同　同課編、求職婦人の環境調査　昭6…515/112/
同　同課編、失業者の實狀に關する調査　昭6…515/114/
矢口孝次郎氏　大村書店編、講座
自第一號至第六號　大12…104/6/1
自第七號至第十二號　大13…104/6/2
自第十八號至第二十三號　大13…104/6/4
自第二十四號至第二十九號　大14…104/6/5
吉地昌一氏　同氏著、生命線　昭6……958/8/
和田禎純氏　同氏著、滿蒙時局と國際聯盟に就いての一考察　昭6……36/30/
造幣局　同局編、造幣局六十年史　昭6…432/127/

購入圖書

PHILOSOPHY.

Kierkegaard, S. – Erbauliche Reden, hrsg. von C. Schrempf.
Bd. 3. Leben und Walten der Liebe. Übers. von A. Dorner & C. Schrempf. 1924 .....129/ 3 / 3
Bd. 4. Christliche Reden. Übers. von W. Kütemeyer & C. Schrempf. 1929 .....129/ 3 / 4

HISTORY & GEOGRAPHY

Cook, S. A. & Others. – The Cambridge Ancient History,
Vol. 1. Egypt and Babylonia. To 1580 B. C. Ed. by J. B. Bury, S. A. Cook & F. E. Adcock. 1928.....231/ 15/ 1
Vol. 2. The Egyptian and Hittite Empires. To c. 1000 B.C. Ed. by J. B. Bury, S. A. Cook & F. E. Adcock. 1926 .....231/ 15/ 2
Vol. 3. The Assyrian Empire. Ed. by J. B. Bury, S. A. Cook & F. E. Adcock. 1929 .....231/ 15/ 3
Vol. 4. The Persian Empire and the West. Ed. by J. B. Bury, S. A. Cook & F. E. Adcock. 1926.....231/ 15/ 4
Vol. 5. Athens. 478—401 B.C. Ed. by J. B. Bury, S. A. Cook & F. E. Adcock. 1927 .....231/ 15/ 5
Vol. 6. Macedon. 401—301 B.C. Ed. by J. B. Bury, S. A. Cook & F. E. Adcock. 1927.....231/ 15/ 6
Vol. 7. The Hellenistic Monarchies and the Rise of Rome. Ed. by S. A. Cook, F. E. Adcock & M. P. Charlesworth. 1928.....231/ 15/ 7
Vol. 8. Rome and the Mediterranean 218—133 B.C. Ed. by S. A. Cook, F. E. Adcock & M. P. Charlesworth. 1930 .....231/ 15/ 8

Vidal-Lablache. – Atlas général: Histoire et Géographie. 420 Cartes et Cartons. Index alphabétique. 1930.....298/ 5 /

LAW

Planiol, M. & Ripert, G. – Traité pratique de Droit civil français. Tome 10. 1. Partie. 1932 .....385-5/16/10-1

Renard, G. – La Théorie de l'Institution: Essai d' Ontologie juridique,
Vol. 1. Partie juridique. 1930 ... 385-2/11/1

EDUCATION

Pestalozzi, J. H. – Sämtliche Werke, hrsg. von A. Buchenau, E. Spranger & H. Stettbacher,
Bd. 10. Schriften aus der Zeit von 1787—1795. Bearb. von E. Dejung & H. Schönebaum. 1931.....552/ 3 /10

百科辭書、叢書、新聞

平凡社編 大百科辭典
第一卷 ア——イカ 昭6……011/2/1
第二卷 イカ——ウチ 昭7……011/2/2

大阪朝日新聞社編 大阪朝日新聞（縮刷版）
通卷四十六號 昭和六年十月號 071/3/46
通卷四十八號 昭和六年十二月號 071/3/48

春秋社編 第二期世界大思想全集
第十六卷 フオルレンダア：マキアベリよりレーニンまで 昭6…001/33/16

同 世界大思想全集
第十五卷 カント：純粹理性批判 昭6…001/28/15

宗教

大東出版社編 國譯一切經
本緣部 二 昭6 ……182/1/
密教部 三 昭6 ……182/1/

地圖

大阪朝日新聞社撰 最新滿蒙大地圖 昭7 ……293/2/

經濟

波多野鼎著 價値學說史
第三卷 折衷學派の價値學說 昭5 …418/28/3

岩波書店編 經濟學古典叢書
Malthus, T. R. 伊藤、寺尾共譯：人口論（第六版） 上卷 昭4 …413/9/4-1 下卷 昭5 …413/9/4-2
Ricardo, D. 小泉信三譯：經濟及租稅原論 昭5……413/9/3
Say, J. B. 增井幸雄譯：經濟學 下卷 昭4 …413/9/2-2
Senior, N. W 高橋、濱田共譯：經濟學 昭4……413/9/3

永雄策郎著 植民地鐵道の世界經濟的及世界政策的研究 昭6……483/21/

大阪商科大學經濟研究所編 經濟學辭典

紹介

國際文學政治新聞

法文學研究所發行

文學政治は吾々のもつ文化の最高の表現である。文學政治を通じて吾々はその時代の社會をあらはに認識する。繼起する社會現象をわれ〳〵は日々の新聞紙を通じて知識するのであるが、しかしそれを綜合聯關するも事象の本質を把握することは難しい。それは新聞報道がを使命として事象を事象たらしめる本質を究明することを目睹しない、即ち哲學を有たないからである。吾々は何を求めるか、社會現象を通じて、その現象を現象たらしめ本質を把握するにある。かゝる意圖のもとに生れたるものがこの國際文學政治新聞である。專門學校程度以上に目標を置いてゐるらしく、編輯もかなり鮮である。敢て購讀をおすゝめする。

二月十一日創刊毎月一回十一日發行、定價一部（税共）十錢、半ケ年六部五十錢、一ケ年十二部一圓

發行所は神戸市北野町四丁目一九

二、法文學研究所

千里山俳壇　朝冷選

□　專法二　難波香久三

道傍に繪を賣る畫師や春淺し

一竿の干足袋風に踊りけり

□　壹岐夕陽

緣に立ちて髮梳く小春日和哉

木枯や鷄尻毛逆立つる

水の音寒さを誘ふ夜半哉

追加　朝冷

窓前や一枝の梅に雨ぬくゝ

水あれば凡そ家ある梅の花

梅の香に誘はれ月のかゝり曉

揭雲雀村は洗濯日和かな

大師道人の遲速に揭雲雀

□當季雜詠募集

□封皮には必ず「千里山俳句」と朱記の事

□送稿先

大阪市東淀川區十三東三丁目

牡丹書房　有田朝冷

編輯餘錄

▼春風暖を布いて柳絮紛々、然れども國家的には內外頗る多端の秋、本學では學部專門部併せて千名の卒業生を送り出さうとしてゐる。諸君の前途輝々洋々たると共に、また自重の切なるものある蓋し言を俟たざるところ、榮ある新卒業生諸君のために、各自の清健と、活社會に於ける今後の奮鬪を祈つて已まぬものである。

▼本號は紙面の關係上、吉田教授の續稿をはじめ、中村助教授の「土地の住民に及ぼす經濟的影響」、中川講師の「英國金本位停止にいたる經濟的背景」藤本浩一氏の「日本民論の主潮概論」を割愛しなければならなかつたこと、及び校友小林太三郎氏の「我國百貨店外貌」をはじめ大學院學生諸君等よりも多數寄稿を得ながら次號にせざるの餘儀なきことを寄稿者並に讀者各位にお斷りいたします。

▼次號よりは本誌の使命たる學校と校友、校友と學生、この兩者の關係をより密接ならしむべき目標の下に校友欄の擴張を計り、先づその試みの一として「校友訪問記」を連載いたします。なほ學生欄は學友會各部の活動情況を如實に反映するものとして今後ますます充實を期する考へですから、各部とも力めて情報を寄せて頂きたいと思ひます。然し紙面の關係上長文のものは遺憾ながら全文の收載は出來かねますので、一回の揭載分量は二百字詰原稿紙四枚程度にして下さい。

▼本誌百號を數ふる月も迫つて來ました。これが記念事業についても今より種々畫策をめぐらしてゐます。

▼本誌購讀者の中で今月を以て維持費切れとなる方々は別揭申込書により今月末までに御拂込願ひます。

大正十一年六月十五日創刊
昭和七年三月十三日印刷
昭和七年三月十五日發行

編輯兼發行人　大阪市東淀川區長柄中通二丁目十二番地　關西大學學報局　遠藤銀

印刷者　大阪市北區堂島上三丁目十五番地　谷口春雄

印刷所　大阪市北區堂島上三丁目十六番地　谷口印刷所

發行所　大阪市東淀川區長柄中通二丁目十二番地　關西大學學報局

天六學舍　大阪市東淀川區長柄中通　關西大學　電話淀川一五〇三、六六〇九　振替口座大阪一二七七五番

不許複製

千里山學舍　大阪市外千里山　關西大學　電話吹田一二三

校友會員名簿について

校友會員名簿御入用の方で未だ御申込なきかたは左欄用紙により基金御拂込を願ひます。なほ次回發行は來る七月の豫定ですから今後御申込の向には次回の分より配附いたします。

昭和七年三月

關西大學學報局

申込書

No.……

一金參圓也　校友會名簿基金

右金額相添へ申込候也

昭和　年　月　日

氏名

明治 大正 昭和　年　學部 專門部　科卒業

一、勤務先

一、現住所

關西大學學報局御中

本學學報は維持費として年額壹圓御拂込の方に御送りして居りますから、校友その他關係者各位に於いて購讀希望の方並に今月を以て維持費切れとなる方は左欄申込書と共に維持費御拂込を願ひます。

昭和七年三月

關西大學學報局

御拂込は郵便爲替か振替かを希望いたしますが若し三ケ年分以上御拂込下さるならば御手數のかゝらぬやう集金郵便にいたします。

學報申込書

No.……

一金　圓也　但學報維持費　ケ年分（自昭和　年　月　至昭和　年　月）

右金額相添へ申込候也

昭和　年　月　日

氏名

明治 大正 昭和　年　學部 專門部　科卒業

一、勤務先

一、現住所

關西大學學報局御中

拂込方法　振替貯金、郵便爲替　集金郵便

（不用の文字を抹消して下さい　但し集金郵便は金參圓以上に限ります）

生徒募集

◈募集人員　第一學年　約二百五十名
第二、三學年　補缺若干名

關西甲種商業學校

○願書受付　三月一日より二月二十五日まで
○入學考査　第一學年　二月二十六日
第二、三學年　三月二十六日及二十七日

◈特長　甲種認可　修業年限三年　夜間教授

關西大學第二商業學校

○募集人員　第一學年　二百名
○願書受付　二月十日より三月二十五日まで
○入學考査　三月二十六日又は二十七日

（量的生産よりも質的向上を目標とす）

北陽商業學校

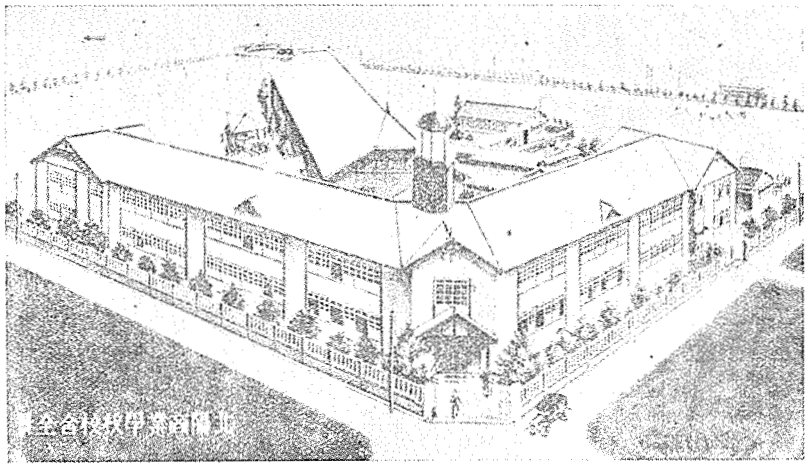
第一部（昼） 文部省認定修業年限五ヶ年制 尋常小學卒業入學資格ナリ　**第一學年八十名**（二學級ニ編成ス）募集ス

第二部（夜） 文部省認定特設夜間授業ノ甲種商業修業年限本科四年制高小卒又ハ同程度ヨリ入學　**第一學年八十名**（二學級ニ編成ス）募集ス

第一部、第二部共上級各學年補缺若干名ニ限リ檢定試驗ノ上入學ヲ許可ス

學則ハ郵便又ハ直接學校ヘ（電話北七五七五番）

所在地　大阪市東淀川區淡路町（天六ヨリ約五分淡路交叉点下車 新京阪電車淡路下車東一丁半）



（量的生産よりも質的向上を目標とす）

本校の特色

一、中學校卒業と本校卒業生の特典

本校は文部大臣の認可を得て設立したる第一部五ヶ年制（入學資格尋常小卒）第二部本科四ヶ年制（入學資格高小卒）の甲種商業學校なれば本校卒業生は一般上級學校入學に關し第一部第二部を問はず中學校卒業者と同等の資格特典を文部省より指定せられ文官任用令により判任官たる資格及在學中徴集猶予（兵役法改正ニヨリ在學中徴兵檢査）ヲ受ケナクモヨイ）幹部候補生たる資格及在營年限短縮其他官公立同種學校の有する一切の特典を有す（本校には陸軍省より現役配屬將校が配屬されて居る）

二、人格の感化は本校教育の第一義

人格の感化は吾人の容易に口にし得べからざるところなりと雖も訓育の第一義は畢竟茲にあり、故に先づ教師の人選を嚴格にし、成るべく言説の教を少くし學校全生徒中に道德的空氣を溢漫せしめあらゆる施設中に德性錬磨の機會を偶せしめ以て方今漸く華美惰弱に流れんする都市子弟を指導せん事に努む

三、本校商業學科と實力養成

甲種商業學校卒業生は一般上級學校に進み得るも商業學校卒業生と同等以上の資格取扱をうけ上級學校に進み得るも商業學校の使命は實際社會に役立つ實務員の養成にあり、故に本校に於いては廣く實業家の實際上の意見を徴し以て商業學科及び珠算科に力をいたし、あらゆる機會をとらへて之が實力養成に資せんとす。

四、人としての教育

學校教育の窮極は人としての教育即ち人間としての教育であるべきなり然るに現時中等教育に於いては餘りに主智的偏し人から人へ心から心への精神教育について比較的省みられず本校が音樂を學科中毎週一時間を加へたるも蓋し意こゝにあり。

五、照明學上より備へたる本校教室

從來高唱されつゝある學校衛生設備は多く費問題學生のみを考慮し夜間通學生の爲めに省みらるもの殆ど無し本校は特に此點に意を用ひて各教室に冬季はストーブを設置し夜間教室電燈其他の設備の完備に努む。

六、教育的環境と生徒の健康

本校新校舎は東淀川區柴島水源地に隣接し流れつきせぬ淀川を前方に東に生駒山西に六甲摩耶山を一眸に望み長閑に霞む春の日は附近一体菜花に埋れ空氣清澄教育上學校衛生上最適地なり。

七、委託生制度

本校（第二部卽ち夜間部）に銀行會社商店の委託生制度を設ii之等入學者は入學に關し特別の取扱をなす。但シ委託生ハ第一學年第二學年ニ限ル）委託生特別取扱は諸銀行會社商店勤務のものにして自己の勤務先の直接監督者の推薦あるものは詮衡の上無試驗入學を許す。

八、關西大學校友推薦無試驗入學

小學校最終成績平均八点以上のものに限り詮衡の上無試驗入學を許可す。

關西大學學生募集

學部

法文學部
- 法律學科（英吉利法・獨逸法・佛蘭西法）
- 政治學科
- 文學科（哲學・英文學）

各科第一學年　若干名

經濟學部
- 經濟學科
- 商業學科

出願期間　三月一日ヨリ四月七日迄
試驗期日　四月八日　試驗場所　千里山學舍

大學豫科　第一學年　三百五十名
出願期間　二月十五日ヨリ四月四日迄
試驗期日　四月五日及六日　試驗場所　千里山學舍

專門部

第一部（晝間部）　法律學科、經濟學科、商業學科……本科第一學年約四百名

第二部（夜間部）
- 法律學科、經濟學科、商業學科
- 文學科（國語漢文專攻科・英語專攻科）

……本科第一學年約七百名

出願期間
- 第一部　二月二十日ヨリ四月二日迄
- 第二部　二月二十日ヨリ三月三十一日迄

試驗期日
- 第一部　四月四日
- 第二部　四月二日

試驗場所　天六學舍

詳細ハ郵券五錢ヲ添ヘ學部及豫科ハ千里山學舍庶務課ニ、專門部ハ天六學舍庶務課宛照會ノコト

關西大學

千里山學舍（大學院・大學部・大學豫科）　大阪市外千里山　電話吹田一二三番

天六學舍（專門部）　大阪市東淀川區長柄中通二丁目　電話堀川（一〇三九番・一一五八〇番・一一七八〇番）

美はしの聲！
豐かな聲量！
は健康から、健康には

いさ下賜信御をクーマ此た得を績實

眼鏡肝油
メガネ肝油球

眼鏡肝油を愛用下さい
あなたの美と健康を増すために……
宮川美子

眼鏡肝油製品
眼鏡肝油
二五〇瓦入　瓶入
五〇〇瓦入　瓶入
五〇〇〇瓦入　罐入
メガネ肝油球
百粒　函入
三百粒　函入
全國有名藥店にあり

眼鏡肝油發賣元
伊藤千太郎商會
大阪道修町